

アンゴラ叢書

特252

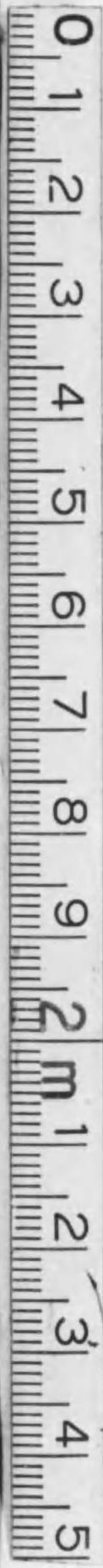
実際のアンゴラ兔飼育

296

アンゴラ飼育と現金収入



東京アンゴラ飼育研究所編



始



特252

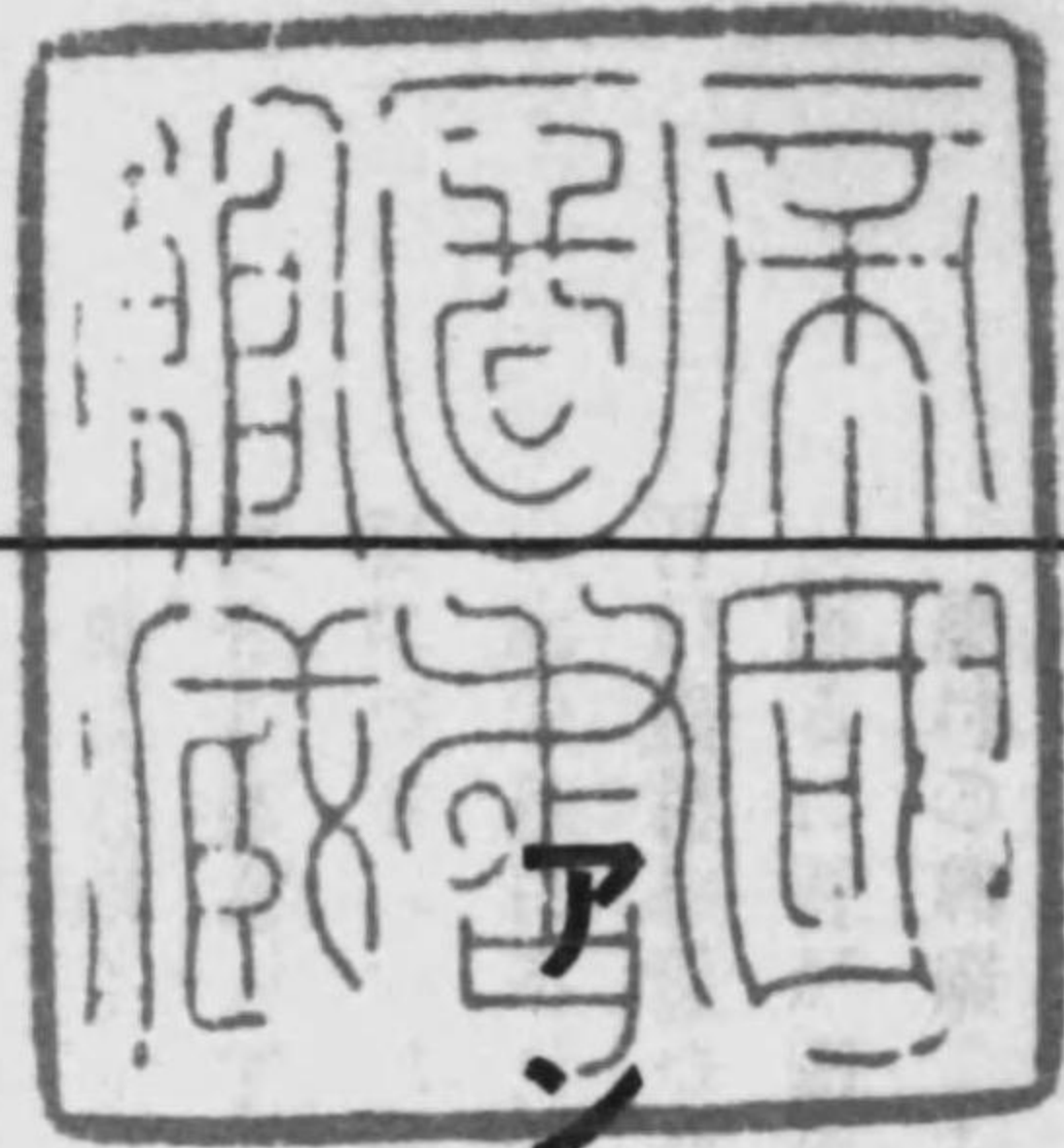
296



五三

...





ゴラ飼育と現金収入

鷺澤 與四二





鷺澤與四二

農村の興廢と吾が國の運命



序

吾が國非常時現下の綜合國力の源泉をなし生産力の基幹をなすものは農村である。農村の興廢こそ吾が國の運命を決定するものである。

而るに吾が國の農村は半永久的不況の中に沈滞して振はず、特に昭和五、六年頃吾が農村を襲つた豊作飢饉は全國農民をして失望の危機に臨ませしめた。

此の秋にあたり、鷺澤與四二氏、風見章氏、野中徹也氏等は共に國事を憂へ、手をたづさへて、野に叫ぶ悲痛なる聲を聴き、其れが對策として農村生活の窮狀を自救せしめんとアンゴラ兎救國の大旗を掲げて副業獎勵に雄叫びを上げたのであつた。

兎は古來より、日本民族が親しみをもち、其の管理方法は容易く老小婦女に由つて出來、飼育費が極めて低廉、而も收入は他の副業の何より優位であり、且つ纖維國策の上に重用なる役割が約束されて居る。

農民は毛で利益を得、糞で堆肥を作り、肉で榮養を攝り皮は軍需品となり、農家

安藝羅 興民



南洋



目次

養民の術……………	一
飼育場落成式に臨みて……………	四
所信に邁進せよ……………	九
恒産恒心……………	一二
現金収入……………	一七
羊毛病……………	二二
金持の協力……………	二六
アンゴラ救國 濠毛問題の餘慶……………	二九
草の戦争 有畜農業の前提……………	三三
都會と農村 獨逸ラウベン・コロニー……………	三七
羊毛の雜説 滿蒙ミアンゴラ……………	四二

アンゴラ・士多志美合併に際して 國策新報生る.....四八

支那開發の根本方策

支那を正視せよ.....五五

(イ) 國際的に見た支那

(ロ) 對支政策の轉換

(ハ) 支那問題は我が國內問題

支那開發の具体策

.....六八

(イ) 英國商權を封ぜよ

(ロ) 北支開發の中樞機關

(ハ) 支那市場の確立策

辜鴻銘を想ふ

辜鴻銘を想ふ.....八一

辜鴻銘先生の人物.....八一

辜先生と張之洞のエピソード.....八三

辜氏の親日と其の夫人.....八六

先生の北京に於ける活動.....九〇

先生と私との關係.....九二

養民の術

政治とは民を養ふに在りとは、古來吾東洋の政治原則である。然らば『養民』とは何ぞやと問はゞ、利用厚生に外ならぬと、吾等の經典は明瞭に訓へて居る。物の用を利かして、人生を厚毅なものにする事、それが、今日の政治經濟の全目的でなくてはならぬ。車を叩き、水を吞んで、喉をからす口舌の辯論政治の形式以上に、利用の工夫あり、厚生之實を備へなければ、國家と國民を利福する目的に外れて了ふ。

今や、世界は人類の未だ曾て經驗せざる不景氣に襲はれてゐる。而して此不景氣退治は、恐らく、近きに其成功を期する事は不可能だ。然し、目前の事實は、物資の過剰をいやが上につのらせて居る。商機は日に委微振はず、人心は刻々沈滞の危機に臨んで居る。而も吾國貿易の大宗たる蠶糸價は五百圓臺に危く止り、やゝもすれば、四百圓臺に落込んとする悲むべき形勢にある。農民は努むれば努むる程、『豊作飢饉』の憂目を見んとしてをる。

最早世の實態は、養民の餘裕もなくなつて、救民の急に走らなければならなくなつた。茲に於てか、先づ野に叫ぶ聲を聽けば、『吾が胃の腑を充せ』の聲に外ならぬ。此秋に當つて、卒然と

して、救國の雄叫びを上げたものは、吾可憐なるアンゴラ兎であつた。『副業としてのアンゴラ養兎』は實に現下の窮狀を、一部なりとも自救する上に於て、早天雲霓の天恵に外ならぬ。古來吾國民と民族的親みを持つ可憐の動物である事を第一とし、それが最も容易く、老少婦女の手に由つて飼育出来る事が第二、第三には年少くも四回の採毛の出来る事と、採毛されんが爲めに作られたる種屬なる事等其普及の全條件を具備し、經濟的方面では、飼育費の極めて低き反對に、その毛の品質は現在存する凡ゆる毛の最上級品たる事と、最高市價を有する事である。而も尙右の條件を、更に一層効果的に確保した一事は、鐘ヶ淵紡績會社が、吾等の提唱を逸早く採り入れられ、その毛織工業の中に加へられ、將來殆んど無限とも云ふ可き、買毛を約された事である。是れに由つて、産卵不確實のアンゴラ兎毛は、一朝に孵化され、且つ將來大成の保證とを、一時に獲得して、從來凡ての點に未完成であつたアンゴラ兎が、一躍して、完全な工業價値を得て了つたのである。只残る處は、國民諸君が、安神して飼育する事である。飼育して必らず利益を擧げる事である。

吾國が聯盟を脱退して、世界が擧つて、日本排撃を行はんとする形勢の見ゆる際に却つて世界の市場は殆んど悉く、日本商品に由つて征服されて居た。此結果は、内に如何なる政策が存した

からか、誰人の力に由つてかと、野暮な政治的返問を繰返す必要はない。過去十年間、生活難と戦ひ、不景氣と抗争しつゝ、三杯の飯を二杯に減らし、儲からの商賣に骨身を碎いた……その一杯の差と血肉とが、商品安を來し、商機を掴ましたものと考へる時、世界が意氣地無く、不景氣風におびへて居る際、世界をして『日本品來』に悲鳴を擧げさせた唯一の功名者こそは、吾農工商民全體と云はざるを得ない。然るに此功勞者は、今や四面楚歌、刀折矢盡んとして居る。果して然らば、少くも一頭の兎から四圓、乃至五圓の收入を擧げ得る副業が確立したとすれば、是こそ、眞に救民であり、養民であると云はざるを得ない。而して、更に國家をして羊毛征服の苦界より脱却せしめ得れば、實に、一石二鳥の收穫であらふ。吾輩が從來の型の政治から轉向して、副業としてのアンゴラ兎普及を全國に呼びかけて居るのは是れが爲めである。

『先づアンゴラ兎を飼へ、然して自ら救はれん』

此標語の實現は、今日以後の日本の政治でなくてはならぬ。

(昭和九年十月記)

飼育場落成式に臨みて

△主催者代表挨拶▽

飼育場第一期工事落成式祝賀を兼ね皆様を願つた所、北は北海道南は九州殆んど日本全国よりアンゴラ飼育者各位の御來臨を見たことは、洵に光榮に存する所で愉快至極のこと、御禮を申し上げます。

吾社事業開始以來僅かに二ケ年に過ぎないのでありますが、飼育者各位の御熱心と折柄の農村窮迫、蠶絲暴落等の原因から副業としてのアンゴラ飼育が、澎湃として日本の社會運動の如く盛んに相成つたと云ふことは洵に御同慶に堪えない次第であります。

其處で吾社はこの副業の普及と共に固き基礎の下に、農家の現金収入を圖ると同時に産毛の増加を主として、吾社同人等は必死懸命の努力を致して居る次第であります。其中心を成すべき飼育場の完成と云ふことが、兎舎改良及普及飼育に對する指導の中樞機關として最も必要なことと考へたのであります。故に先づ以て中央に飼育場の完成を圖ることが第一と考へ、昨年度より工

事に着手して今日御覽の如く飼育場の第一期設備が完成致した次第であります。更に又第二期第三期と致して御覽の如き宏大なる地域に完全なる飼育場を完成致すことになつて居ります。

此際最も喜しき事は此のアンゴラ兎が生産する毛を原料とする製品が、單に内地のみならず歐米諸國、言ひ換へれば全世界の注目を引いて、日本に於けるアンゴラ飼育が、アンゴラ工業者に注目視される所となつたことは洵に愉快なる状況と云ふ外ありません。

斯の如く鞏固なる發展の第一歩を踏み出す事の出來たと云ふことは、要するに大鐘紡が無限に此毛を買入れて農村の窮迫を救ひ、商工業發展と同時に救済を致すと云ふ津田社長の大豊富に依ること、考へるのであります。

今日此處で發表する事が善いか、悪いかは別問題と致して鐘紡本社よりは「鐘紡製品に對する歐米からの注文が殺倒致して居る次第で、どうか農家に於けるアンゴラ兎の飼育を今後何十倍何百倍に増加して呉れ」と云ふ頻々たる手紙に接して居ることでありませぬ。

要するに如何なる産業に於ても、最も貴重なる事は生産を致す以前に其生産品の市場を先に獲得することが第一義であります。然るに御承知の如く我が鐘紡は、最も堅實なる工業會社であるのみならず全世界の樞要なる都市には必ず其出張所或は支店等を持つて居られる、製品の出來次

第之を全世界に提供する事が出来ると云ふ工業販賣機關となつて居りますから、唯我々には如何にして之を普及し、又如何にして其産毛の額を増加せしむるか云ふことに一意専心すれば宜いことになつて居るのであります。故に従來の如く種々な副業の経過し來つた道と違つて之は需要の確定致して居るものを、最も確實なる取引に依つて取扱はれるのでありますから、飼育者に於て何等の不安もないのみならず將來に亘つて非常なる期待を以て然かるべき事業と相成つて居ります。

其處で吾社は此狀況に鑑み最も有利にして便宜の方法を案出する爲に一段と擴張を致す必要に迫られ、唯今第二東京アンゴラ兎毛株式會社を設けて増資擴張の準備中であるのであります。何れ御手許に増資に関する書類を御届け致す事と相成るが、茲に一言お斷りを致して置かなければならぬ事は株式會社とせば營利會社である。従來國際外交ばかりに専念致して營利の方面には殆んど無關心である私の名に於て、此營利會社を營むと云ふ事を聞かれたならば或は一部には驚澤は營利に轉向したんではないかと云ふ風な御考へを持たれる方も多からうと思ふ、併し營利なる文字に示すが如く其實は營利でありますけれども、私一人の營利でなくして、國民全体に利益すると云ふ營利である。即ち兎を飼ふ人の懐中を肥すと云ふ營利であつて一營利を圖る者ではない

のであります。即ち私の確信を以てすれば是れこそ本當の民衆政治であり、自分の政治生活の全部であると考へて居る次第であります。

故に株募集の如きも各方面よりプレミアムを付けて賣出すとか、或は市場に之を提供したならば非常な利益を生ずると云ふやうな勧誘を受けて居りますが、之を全部退けて一切公募せずに、同志縁故の間に之を需めて、吾社全國八千の飼育者諸君に一人一株の割を以て應募の途を講じて若しも吾社が利益する所ありますれば即ち其株主たる全國の兎の飼育者が利益すると云ふ形式を執ることに致しましたので是は兎を飼ふばかりでなく、現狀に照して報國救民の志を同じふする方々の御協同を得て我等の立場を完成致したいと考へます。現在の社會及政界を願れば、有能の士、練達の士は寧ろ國家を忘れ國事を私するやうな實情にある時代に、此の可憐なるアンゴラ兎が無心に國を救ふ有能なる國家の愛國者となつた事を想ふと、お互に一段の發奮心を起こさなければならぬかと考へて居ります。

何卒今日御集りの方には斯う云ふ意味に於て御共鳴を願つて、此アンゴラ兎の普及を計り發達を計り、以て國家國民の救済に志す大事業を完成致されんことを御願ひ致す次第であります。

今日は吾社が貧乏であります、創設以來未だ二ヶ年に過ぎないが、明年度に於ては必ず諸君を

驚かしむるやうな發展の御披露を致すことが出来ると確信を致して居る次第であります。尙ほ是れが濟みましたならば飼育場を御視察下され、兎の生活状態、産毛の處理及製品等陳列致してありますから充分に御覽になつて御批評を仰ぎたいと思ふのであります。

一言落成式に當つて同好の各位と喜びを頌ちたい爲に御挨拶を申述べた次第であります。

(昭和九年五月二十日述)

所信に邁進せよ

我アングラ界の全貌を直視し、既往三ヶ年の足跡を回顧するならば、如何に堅實なる地歩を占めつゝ發展し來りしかを知るに難くない。

世の中には既に開拓された平々坦々たる廣い道を、何等の苦汁も味はず、得意然として歩いて行くものもあるし、峨々たる未踏峻嶮の地に、汗と血潮にまみれつゝ、自ら人生を切り開いて進むものもある。兩者の間にある『苦と樂』との差は、平凡な世俗の解釋に訴へるならば、非常に大きなものであらうが、先人の驥尾にのみ付し自らは何等必死の努力を傾注する事のない平坦な人生は、決して男子の本懐とすべきところでない。

我アングラ界の歩み來りし道は、正に荆棘茂れる前人未開の難所を自ら斧を振つて、一歩一歩切り開き、堅實なる足場を作りつゝ登攀するに等しい行程であつた。

吾人はあまりの難行に悩まされ、幾度か踵をかへさんとした。殊に全國津々浦々に至る迄、アングラ兎を危険視し、尙甚しきは、これをインチキの代表なる如く扱ひ、只々冷笑慢侮にのみ耽り、吾人の所説に耳を傾くる者尠なかりし事は、何よりの痛手であつた。吾人は其基因する所果

して何處にあるかを、こゝに繰返して言ひ度くない。しかし其爲に味はされた苦汁の味と堪へ難き迄に冷酷視された體驗は、終生吾人の腦裡より離れ去る事なく、表裏常なき世情人心を解剖する鋭利なるメスとなつて、自からを益するであらうと考へて居る。

吾人はこの堪へ難き迫害重壓にも、見事堪えた。流露たる汗を拭ひ、滲み出る血潮を洗ひ乍ら切り開いた荆棘の道は、吾人の希望に通ずる道であつた。同胞八千萬中、未だ何人も足を踏み入れた事のない處女地は、吾人が斧を振ふ度毎に切り開かれてゆく。

其偉大なる歡喜。

然し吾人の歩み來りし行程は、未だ一里にも足りないのだ、眞に希望する目的地は、未だ千里の彼方にある。

採毛アンゴラ養兎事業の生命は永遠にして價值は無限だ。

我國のアンゴラ界は、眞に自主獨往、あらゆる障害を踏み越へて進みつゝあるのだ。

度し難き頑迷論も、退嬰的消極論も既に吾人の足下に踏みにじられ、奄々たる氣息をもらしてあるか、なしかの存在を示して居るに過ぎないのである。

吾人は滿天下に絶叫する。價值なき理論鬭争を直ちに止め、其の實體を正視せよ！と。

吾人は空論によつて今日の所信を得たのではない。單なる推察によつて現在の動向を握り得たものではない。一日たりとも休むことなき實行と、絶へざる研究の結果、自然に到達した確信である。

故に實行と研究を伴はざる幾億の空論を以つてするも、吾人の抱く信念の一端をすら打ち破ることは絶対不可能なのである。

アンゴラ養兎を非難するものがあるならば、吾人は只一言「吾人の所信を聞け、而して自らこれを飼育すると共に兎毛の真相を研究し、各自の體驗と認識に基いて論議せよ」と言はんのみ。貴重な體驗と眞摯な研鑽による所論ならば、吾人は喜んで耳を傾ける。然らざるに於ては、顧の價值なき空論として葬り去らんのみ。

我國アンゴラ界の前途は實に洋々たるものである。如何なる方面よりこれを検討するも一點の危惧すべき何物も有しない。

飼育の上より見た我國風土の快適、需要上より見たアンゴラ兎毛の廣汎、確たる販路、共に我國アンゴラ事業の前途を卜するに足るものである。(昭和十年五月記)

恒産 恒心

一一

アンゴラ兎の凡ゆる方面に有利である事を力説して今日まで前後十年にもなるが、一方から観れば非常に進歩だと思ひ、他面から観れば捗々しい進歩でない様ないぢらしさを感じる。

世の中と云ふものは變なもので、良いからと云つてもそれが廣がるのでもなく、悪いからと言つて容易く根絶も出来ない。「悪事千里を走り、好事門を出でず」と云ふやうに、何事も思ふやうにはゆかない。我がアンゴラも今日まで副業の良い事だけは確立して居るけれども、之を全国的に擴めて、所謂アンゴラ救國の實現を圖るまでには容易ならざる苦心が要る。今年に至つて著しく光明が認められて來た事は、誠に愉快であるが過去十年を顧ると、實にアンゴラの普及は文字通り血みどろな惡戰苦闘であつた。それは我々ばかりでない、飼ふ人も、取扱ふ人も皆なその苦難を嘗めて來た。

孟子は「恒産あるもの恒心あり、恒産なくして恒心あるは君子あるのみ」と喝破してゐるが、生絲の市價が慘落をし、農産物の價格が下降し、一般生計の物價が其の反對に向上して來て、農家は實に過去數年間死線の上に彷徨ふて居つた。

斯ふ云ふ時に一匹の兎から三、四圓余の收入を得られると云ふ事は、實に天來の福音の如く響いて、其の普及は燎原の火の如く廣まるだらうと何人も思つた。

然るに事實は、廣まるものはブローカーの魔手で、農家は寧ろアンゴラの危險に怯て居つて、アンゴラ飼育に對する熱が上らなかつた。實に是は不思議な現象で、困つて居たなら此の有利な副業をやりさうなものだと、何人も考へ及ぶのに寧ろ其の反對の現象が現はれて、遅々として進まない。其の間隙に乗じて、無責任なる飼育者及びブローカーと云ふもの、跳梁を見て甚だ不愉快なる状態を現出したのである。

昨年度の末から俄かに生絲市價が昂騰するに従つて繭價の昂騰となつて、農家には尠からざる増收があつた。

そこで我々は皮相的に斯う考へた。農家の現金收入を有しない時でさへも兎は飼はれなかつた然るに生絲の値段がこんなに昂騰して來ると云ふ事になれば尙更、兎を飼はないで、養蠶の方に向いてしまふのぢやないかと悲觀し亦豫想して居つた。

然るに事實は如何かと云ふと、全然アベコベの現象が起きて、最近に至つては、各地共に飼育者の簇出するのに應接に暇なき程であつた。而も尙ほ其の飼育者の素質及其の組織等を見ると、

從來とは比較にならぬ程の堅實な進展振りを見せて居る。實に不思議な現象のやうに思へるが、振返つて能く裏面を観察すると矢張り聖人の言葉のやうに「恒産あれば恒心あり」で、多少の余裕がなければ、人間社會の發達と云ふものは行はれるものでない、と云ふ哲理その儘に今の現象となつて來たことは、大いに我々の深く考へなければならぬ事柄である。

斯の如くにして、副業確立の機會を捉へた今後は益々右様な意味から云つて、堅實な發達をするに相違なからう。

更に又愉快な現象はアンゴラの製造及使用が一段と根強く擴められて來た、と云ふことは飼育の普及と相關聯して實に愉快な現象と謂はざるを得ない。

例へばアンゴラの使用の方面を見れば、アンゴラの持つて居る性質を極めて原始的に取扱つた肌着等であつたが、今年は羊毛と對立するやうな所謂羅紗製品と云ふやうなものに歩み出して來た事は、アンゴラ製品の本格的發展進路と見ざるを得ない。

又毛そのものに就ても工場製品以外に、家庭が眞正直に特徴あるアンゴラの毛を利用加工するやうになつたことは喜ぶべき社會現象と言はざるを得ない。今までアンゴラの毛は防寒具と云つたやうな單なる觀念で、粗毛を賣つて居つたものが、之を各等級に差別して、其の差別に従つて

相當な製品を自から案出して見様と云ふやうな傾向を生じて來たことは、實に副業としての眞價を現はして來たものと考へる。

又製造工業者の立場から見ると、從來は特等品とか、一等品とか云ふ高級品のみを、アンゴラの特徴ある原毛として作つて來たものが、今日は三等、四等、乃至はフェルト等を多重に必要とする製造に向つたと云ふ事は、是亦アンゴラ兎毛製品の工業過程に於て正しき軌道に復したものと見ざるを得ない。

尙は是等の軌道の上から今後の進路を見るとまだ、前途遼遠なものがある。

例へば日本ではアンゴラと云ふものゝ毛に對しては、刺毛は一つの傷であるかの如く考へられて現在尙は居るのであるが、此間フランスに見本を出して、彼の地の市場具合を打診して見た所が、先方から斯う云ふ問合せが來て居る「此の兎毛の中には刺毛と云ふものが一本もない、何故ないのか、或はこれは兎が榮養不良の爲に刺毛を充分に生じて居らないのか」と云ふやうな問合せがあつた。アンゴラ兎の特徴はあの柔かい毛であると同時に、刺毛が混つて居る所に特殊な味が出て來る、それが今日世界的にアンゴラの特質なのである。

然るに日本ではまだ刺毛を一つの傷物の如くに取扱ひ之に金をかけて撰別して居る様な状態で

ある。恰も米に譬へれば玄米で食へば一番栄養價值があるのに、手間をかけて態々栄養分を捨て、白米として食つて居ると云つた様な差が西洋と日本との間にある。

アンゴラの毛は全部之を用ゐて少しも差支へないものである、毛織物界に於てはアンゴラは全部ダイヤモンドである、一毛と雖も捨てるべきでない、と云ふ時代にまで押し進めなければならぬと思ふ。

何にせよ、以上の傾向を考へた時に我々は副業としてのアンゴラを社會に提唱して、所謂アンゴラ救國を企せんとする立場から見ると、實に愉快なる傾向で、是は偏にアンゴラの特徴の然からしむる處ばかりでなく、飼育者諸君の熱と努力と正しき認識とにある事と思ふ。尙此の傾向を益々急速度に進める必要がある事を痛感する次第である。

(昭和十一年一月記)

現 金 收 入

農村救済問題は、政治的に見ても、また社會政策の上から見ても、現在日本の國礎を固める上に於ては當然實行されねばならぬことだが、徒に農村救済といふ概念的叫び乃至要求と云ふものを無検討に是認する譯にはならなくなつたと思ふ。

何となれば、救済といふ文字の蔭には、何か國民が無能力でゝもあるか、または憐むべき状態にあるから救済しなければならぬと言つたやうな形に受取られることは、その農村救済に對する基礎的觀念としては非常に間違つた事だと思ふ。

何故かと云ふと、農村救済を旗印にして、一角の佐倉宗吾郎ばりの志士仁人の資格を帯びたかのやうに見えるが、果して我が農村民は左様の意味に於て救済さるべきものなりや否や、私はそんな意味で農村救済を叫んで居るのではない。

凡そ世界の民族史に於て我が農村人位優秀な歴史を持つて居る民族はない。先づ我國の民族政治史を見ると、用語は古いが、一君萬民の政治と云ふものが行はれ始めたのが千二、三百年以前である。

かの百人一首の冒頭に掲げられて居る 天智天皇の御製の如きは、農民の秋の收穫を見そなはず爲に、陛下自から秋の野に御野立ちされて、刈穂の庵の苫をあらみ、一假家をつくられて—その中に農民の喜々として收穫するさまを御覽になつて、夕陽傾く夕べまで民と共に喜ばれて居つた爲に、「わが衣手は露に濡れつ」と云ふ所謂御製と相成つたのである。これこそ實に日本の農民生活と一君萬民の政治との一致を見たる麗しい我が國固有の農村政治と謂はざるを得ない。然るに一度政權が藤原氏の手に渡り、更にそれが武家政治に至り、源平より足利、北條、織田豊臣、遂に徳川氏に至つて、六十年以前の王政維新に至るまで、この農民と一君萬民の間に、政權奪者が現はれて搾取をこれ事とし殊に武士階級の如きは農民の全權利を剝奪して、これに會へば土下座せしめ、土下座の仕方が悪ければ手打にする。而もその汗水の結晶である農産物は上納と稱してこれを徴發してゐる。農民大衆は姓を與へられず、たゞ名を以て呼ばれると言つた様な非人類的な取扱ひを受けて居つた。

この慘虐なる壓制、搾取と云ふものを受くる事千年以上、若しこれが他民族であつたならば、とうの昔に擦りきれてなくなつてゐる位の虐待を受けてゐた。然るに六十年前、王政維新の炬火に依つて再び一君萬民の政治が回復せられ今日に至るまで僅か六十有余年にして、どうであらうか世界を經濟的に征服してゐると云ふ隆盛を見るに至つたその原因及び其の功績は何處にあつたらうか。

今日白色人種國家が、一日本の經濟的進出に辟易して全世界悲鳴を擧げてゐると云ふ此の文字通りの躍進日本を現出したる動機は、大政治家の存在ぢやない。また大政策の遂行の結果ぢやない、實に國民大衆が刻苦、缺乏に堪え、克己、已れを空うして、而て國家、民族の爲に一大飛躍を試みたる結果に外ならない。寧ろ政治はこの優秀なる國民のある事に依つて怠惰、腐敗し、政治家も亦優秀なる民族を背景とすることに依つて怠惰、墮落の境遇に陥つたと云ふ状態である。斯の如き事實から推論すると、世界に於て我が國民位、優秀な潛勢力を持った國民は世界絶無である。言ひ換へるならば、我が民族は表面に現はれてゐる力、或は隠れてゐる潛勢力、いづれかに依つて凡ゆるものを具備してゐる有能民族である。それが今日農村が不況に陥り、困苦の極に達してゐると云ふのはどう言ふ譯か、世界が經濟的に日本に征服されたと云ふ反面には、日本の商品は世界の津々浦々に賣れてゐると云ふことを立證してゐる。日本の商品が普く世界各地から歡迎、好愛されてゐると云ふ結果としては、日本は世界第一の富有國となつたと云ふに外ならない。

然るに、數字の上に於て、或は理論の上に於ては世界第一の富有國であるが、事實を見れば我が國內に於ては農村が日に／＼困却して行くと云ふ矛盾した結果の現はれるのはどう云ふ譯か。要するに今日、日本の農村は千圓の品物を僅かに二、三百圓乃至五百圓位で渡してゐるから日本の貿易が旺んになればなる程、我が農村が疲弊する道理である。故に上述の如き能力を持つてゐる農村にはたゞ一つの缺けたものがある。それは何かと言へば、現金収入がなくなつたと云ふことである。

然し十二月二十五日頃から銀座街頭にかつぎ出される慈善鍋の如き手段に依つて或は觀念によつて、我が農村救済は叫ばれるべき筈のものぢやない。先づ以て農村に現金収入を興へると云ふことに依つて、農村は何人の援けにも依らず、何人の慈善にも依らず、何人の恩顧に浴さずに自から救済し得る天賦を持つてゐるのだ。

吾が輩がアンゴラ兎を提唱してゐるのは副業を授けると云ふ原因よりも、日々に多少なりとも現金を得せしめると云ふ結果に重きを置いてゐるからである。救済と云ふ空虚な概念に依つて農村を救済すると云ふ不眞面目を一掃して、農村をして現金を得せしめると云ふ一事に、我が農村對策を集中すれば、そこに自發的に農村繁榮が現出する道理である。

即ち今日の國際日本の政治確立の核心となるべきものはこの些々たる現金収入の一事に國策を集中することに依つて達成される。即ち吾輩が「安護羅救國」を標榜する所以である。

(昭和十一年四月五日記)

安護羅の字義

アンゴラを安護羅と譯した吾輩は、安は讀んで字の如く、安全、安泰、安樂の安。

護はまもるの義。羅は網圍ひで魚を一纏めにする意で即ち網羅の羅である。故にアンゴラを飼へば、飼ふ事それ自體が人間を勤勉にする上に、毛で利益を得、糞で堆肥を作り、肉で榮養を攝り、皮で錢をこる、實にアンゴラはどの點から見ても安と護と羅である。(南萍生)

羊 毛 病

二二

小日本が、大日本になる迄の、過去五十年間の日本文化は、歐米模倣、泰西崇拜で、彼等が數百年かゝつて築き上げた文化を、そのまゝ頂戴して了つたのであつた。然し、大日本に生育された今日の日本は、もう西洋の切れつ端であつたり、依然たる歐米追隨であつてはならぬ。どこ迄も日本の日本でなくてはならぬ、之は單なる理論ではない、事實、現在の日本品で、歐米の夫れに劣つて居るものは、極く僅かなものになつて居る、而も、之れとて近く數年の中には彼等を凌ぐ良質のものが現はれて來る事が請合れる……その位現在の日本は、世界一を語り得る地位に在るのだ。

然し五十年間の惰性的の癖が残つてゐて、吾々の精神、經濟、政治各方面の生活上に災を爲して居るものが少くないのは困つたものだ。先づ其一例が羊毛病である。動物質のものでは、絹以外のものを身に多く着けなかつた吾國民は、泰西文化輸入の先驅として、初めて羊毛に觸れたので濕潤な土地柄丈けに、羊毛の珍重は非常なものとなつて、見様に由つては、日本人が世界で一番大膽な洋服國民であると云つていゝ位になつた。

日本人の頭では、毛と云へば總て羊毛であり、毛織物は悉く羊毛である。それが駱駝であらうが、カシミヤであらうが、毛でさへあれば皆羊毛と吞込んで居る程、羊毛にとり付かれて居る。だから毛織物の手觸りは、皆ザラ／＼して居なくては、毛織物とは思はない。春先き流行の先驅は、何と云つてもセルであるが、あのザラ／＼して、チク／＼刺す重いものを肌に着けて得意がつて居る圖は滑稽である。

近頃、絹糸の洋服が、至る處で作られて居るが、皆云ひ合せたやうに、一寸引張ればブツンと切れて了ふ程撚をかけて、ザラ／＼に織つたものを賣り出して居れば、之れを又買つて國産絹洋服などと得意がつて居る。手觸り善く、光澤があるのが絹の特長であるのに、之れをわざ／＼殺して、粗惡な羊毛化して喜んで居る無智は、香水から香を摘出す手段に成功して喜んで居る愚に等しい。光澤があつて、手觸りいゝ絹服では何故いけないのか、西洋には絹が無く、其反面に彼等の持つ殖民地に羊が居るから、現在の羊毛服が一般化したのだ。

この羊毛病の結果として、今日濠洲其他から輸入して居る羊毛は、年額二億數千萬ポンド（約二億數千萬圓）に達して居る。當局もこゝに見る處があつて、盛に緬羊の輸入を計つて、羊毛調節に當つて居るが、今日既に一千萬圓を支出して居るが、一般は毛よりも、子供の賣買に利益を

計つて居ると云ふ現状だから、綿羊驅逐にはならず、却つて羊毛病助長を計つて居るやうなものだ。日本には羊毛を得る殖民地もなければ、内地産は單なる農家の遊戯的副業たるに過ぎないのであるから此年額二億萬圓の節約は、如何にしても、之に代る毛を國內に求めざるを得ない。それで問題の結論は、當然アンゴラ兔に歸着する事になる。いつも例に上げる數字ではあるが、若し、五百萬戸の農家が毎戸一番の兔を飼ふ事とすれば、一千萬頭、年額五百萬ポンドの産毛があるわけだ。従つて金額としては二千萬圓以上の農家現金の収入となる。即ち羊毛の輸入額の一割に當るわけだ。若し日本の羊毛製品中に一割のアンゴラを交織するとすれば、右の數字で充分と云ふ事になる。而も、毛の品質から云つて、最上級の毛質であるから、一割の交織は、品質向上の上に於て、驚く可き良質のものとなるわけである。

世界で自分丈が大量生産の出来る絹を、日本人は身に着けずに歐米人にのみ盲目的に頼り、自分は濠洲産の羊毛と印度産の木綿を着て居る矛盾を敢てして「どうも絹糸の値が出なくて困る」と口小言を言つて平氣で居るとは情けない。自らドシ／＼絹を着、木綿に代へるに吾國特有の人間を着る事を計り、且つ養兎に由つて、羊毛病調節と、有畜農業再建の一石二鳥の國策を樹立する急務に迫られて居る事を自覺しなくては、國本培養も、農村救済も、今の通りでは破戒僧の空

念佛となる。

何れにしても、「安護羅救國」を吾々同志の手に由つて完成して、恐る可き羊毛病と木綿病を緩和しなくてはならぬ。(昭和十一年五月五日記)

アンゴラは吾輩のマスコットだ

鷺澤さんの氣焔

時計は午前十時、八端のドテラの上にガウンをひっかけた候補者鷺澤與四二氏は、寝不足な眼で、膝の上のせたアンゴラ兔を器用にいちり廻してゐる。

記者 時にどうです。選挙とアンゴラ兔と云ふ所を一席。

鷺澤氏 アンゴラと云ふのは兎の産地トルコの首府アンゴラーからきたもので、僕は今日これを安護羅救國と言つてゐる。詰り農家にアンゴラ兔を飼はせて現金収入を得させると云ふ意味であるが、僕がこの安護羅救國運動を始めてからモウ十年になる。農村が意久地のないのは現金収入がないからだ。海外では生糸の賣行をよくし、國內では現金収入を得させることが政治上の必須條件で、今日のアンゴラ農村救済運動は、内政であり、外交であり、國防である。

と選挙と云ふより寧ろ政治とアンゴラ兔の科學的理論を一わたり、而も正面切つて出られたので聊かテレた。(東京日々新聞より)

金持の協力

二六

「村の共榮を一番心配して居る者は誰か」村長さんか、村會議員さんか、それ共、産業組合のお役人さんか。這ふ數へ上げなくとも、村の繁榮を思はぬものは一人も居なからう。打ち續く不景氣に、骨の髄迄打ちのめされて居る村の疲弊を見ては、どんな心無しでも、犬でも、猫でも、村の共榮を祈らざるを得まい。單に貧棒と云つても、それが個人……イヤ個人限りの貧棒なら、砂利を噛んでも生きて行く途もあり、亦死なずにやつてのける勇氣もある。然し日本はその成立から云つても個人の國ではない、一家であり、一村であり、一國である存立單位が、互に隣保共助に生活義務を自覺しつゝ、民族的生存と繁榮を約束されて居るのであるから、個人よりは一村の共榮に先づ第一義の關心を拂はねばならぬ。之れが西洋と異なる處で、亦吾民族社會の強健を來す所以でもある。

此見地から、一家庭の副業確立を目指して、**アングラ**養兎を提供して居るのであるが其第一歩として、自分は其地方の「金持」に呼び掛けた。何となれば、今の農村の疲弊で一番痛手を感じて居るものは、詮り其村費の大部分を負擔してゐる所謂村の資産家でなくてはならぬ（尤も大底は巧妙に脱税法を實行して居るものにして）村に居れば過大なる負擔を餘儀なくされそれが嫌なら財産を東京に移す事になるが、そうすれば村民からは忽ち非國民呼りをされる。従つて、正直な村生へ抜きの金持は、何とかして、村全体の繁榮を計つて、同時に自家の重荷を軽くしやうと考へるに相違ない。故に理論上から云つて「金持ちが、眞實に村の繁榮を希ふて居るのだ」と云ふ結論が得られる譯だ。

此呼吸を計つて自分は、各地の金持を歴訪して「**アングラ**養兎の外に現金収入を簡單に得られる副業は無いから、一日も早く其普及を計りなさい。然し、現在の農民は一番十圓二十圓の種兎を買ふ資力が無い、さりとて全國何百萬の農家に只で配給は出来ないから、金持は千圓なり二千圓なりをお出しなさい、一番十圓なら千圓で百番買へる。それを居村の農民にお貸しなさい、或は只呉れてもいゝ、一年に十羽の仔を産むとしても千羽仔兎が増へる。一羽一圓でお護して組合設立や、農民への廉賣をやつたら、それ丈で、千圓の元金が返つて呉る、損をせず一村を賑かしつゝ、副業の確立を見るのであるから、金持が斯くして村人から其後姿を拜まれる事になるのだ」と、今日尙自分は隨處に此理を説き且つ勸誘之れ努めて居る。茨城縣や埼玉縣などの養兎成績の擧つて居るのは金持諸君が皆此説に聴き、且つ之れを實行して呉れた結果である。

二七

話は少し岐路に入るが、農村の自力更生を計る第一義の必要事項は、徒らに政府の補助金などを當てにする事でないに、村の金持資産家を、善良に利用する事であり、亦金持としては其善良な利用に乗つて以つて、自他共に救ふの眞摯に返らなければならぬ。村の聲がいつも金持攻撃であり、金持は讀んで字の如く、只金を持った切りで、出す事を知らずと云ふ有様では、何時迄経つても、村の更生や、繁榮を來す事は出來ないではないか。支那では、資産家の事を「金持ち」と云はずに、「發財」「ソファーツアイ」と呼んで居る。持つて居る丈では隣人を需ほさぬ点に於て何の役にも立たず金の番人に過ぎない、之を大いに發して、四邊を賑はす事に由つて、資産家が社會に重ぜられ尊敬されるわけだ。と云つて、金満家の放蕩は困るが、養兎に限らず、村の繁榮に、取らんとすれば、先づ與へよの賢明な態度に出てほしい。

故にアンゴラ養兎はしたいが農民には金が無い、然し金持に資金を仰いだら出來る。金持も出してやり度いが、保證して呉れるかと云ふならば何時でも自分は保證してやると云つて居るのだが、百萬長者がまさか千や二千の金の保證を、素寒貧の自分に頼むわけもなし、大方の金持との話は、いつもそれ切りになつて了ふのが常だ。如何にも残念な話で、農民を救ふのでなく自分を詮りは救ふのだと云ふ自覺を、世間の資産家に起させ度い。(昭和十一年六月五日記)

アンゴラ救國

濠毛問題の餘慶▽

愈々濠洲問題は爆發した。此方の品物を買はないと云ふなら、お前の方の羊毛も買つてやらなと云ふ擁護法なるものが、傳家の寶刀と銘打つて飛び出した、その成行きがどうなるものか、女々しい詮議立ては二の次として、第一に問ふて見度いのは……

先方がヘコたれたら又買つてやる量見か否か、此点だ。躍進日本を、寄つて、たかつて叩き出さうと血眼になつて居るのが、現在の世界だ。又その世界の牛耳を採つて居るのが英國だ。その英國へ、年額二億數千萬圓の羊毛を買つてやつて、忠勤を勵んで居るのは誰だ。儲かるから濠毛メリノを買はなければ、と云ふ商法を今後も續けていゝものか。「國防第一」をよく好かに不拘「立國日本」の鐵床としなければならぬ今日、擁護法は一時的の脅しでなく、最後の止めだ、と解釋しなければ嘘だ。

躍進日本の選手である農工商民、そのコーチ兼代りの役人政治家等が、徹底的に英國忠勤の

羊毛と木綿を身につけて居ていゝものかどうか国防第一線に立つ兵隊さんの服が、英國領の所産であつていゝと誰が承知する。

絹よりも木綿が安い、安いから經濟だ、と云ふ觀念は、收類的資本主義の末期の觀念だ。そこで、有り餘る自國産の絹を捨て、木綿に走り國民擧つて自滅の過程に苦惱しつゝ、尙且つ自力更生を叫び國産自足を唱へて居る。之れを吾輩は「日本人の木綿病」と名付けて居る。

矢張り動物質の優良毛とも云ふ可き絹を捨て、濠洲やゴビ沙漠でなければ採集されない羊毛を、何をおいても買入れて、國土民人を貧棒に押しやつて居る「日本人の羊毛病」は前に指摘した通りだ。

人絹を卑み、絹の價値を忘れて、羊毛と木綿を一着に及んで、鼻唄交りの國産を説き國防を唄ふて歩き廻る圖は、髪を縮らせて、頬つべたを塗り立て、ツンツルテンの洋装で銀座をネリ歩く、無教養のフラツパーにも見劣りがする。

柔くて、綺麗で、肌ざはりが善くて、その上温くて軽い絹は、何と云つても、第一等の保健原絲ではないか。ステープル、ファイバーを「人造羊毛」とは誰が譯したのか、如何に羊と云ふ字と毛と云ふ字を使つても、ステープル、ファイバーは植物性纖維で、厘毫も羊でもなければ

毛でもない。

羊でもなく、毛でもない別質の代用品を、羊毛を否定して大騒ぎをする裏面には、依然として羊毛と絹とが活躍せざるを得まい。こゝに羊毛と云つても、濠洲の夫れではない、滿蒙の羊毛を指して云ふのだ。此羊毛と此國産天然絹絲を混織して、初めてステープル、ファイバーが羊毛的役を果すのだ。

イヤ、天然絹絲と支那羊毛とステープル、ファイバーを、その何れにも優つた良質の質的變化を起させる物が、吾アンゴラ兎毛である事を忘れてはならぬ。若し絹、羊、ス三絲が鐵であるとすればアンゴラはモリブデンである。

鐵は無限にある、之を鍛へる正宗は天下に満ちて居る。然し、世界無比の日本刀を鍛へ出すには、少量なりともモリブデンの混用融和を必要とする如くに、吾アンゴラ兎毛は鐵を活し、正宗の腕を、愈々冴へ返らしめる毛織國策の心髓である。

而もアンゴラ兎毛は、代用品ではない、現在地上に存する「毛」の中最優秀品で、加之、此増産を計り得る國は、吾國の外にないと云ふ、質と條件の上に恵まれて居るのであるから、問題は今日以後は一に「其産量を増すにあり」と云ふ點に歸着される。

吾等をして必らず事實となる夢物語を語らしめば、「金を眞鍮の如く使ふ」時代の出現をみる事である。年額二億萬封度の輸入羊毛の一割を、吾が可憐なアンゴラが補充するとすれば、二千萬封度即ち約四千萬頭の養兔を要する事になる。吾社が不取敢二百萬頭計画を立てた事などは、誠に内輪にみたお恥かしい「大計劃」ではないか。

津田鐘紡社長は一日四千封度納入で宜しい、イヤ、一日一萬封度でも年額タツタ三百六十五萬封度ぢやないかと、聴く者の度肝を抜いて居る。羊毛國賊、木綿亡國を唱ふる反面に吾等の唱ふる「アンゴラ救國」は、もう空語では無くなつたではないか。

大いに飼ふではないか、全然人間の罪である飼養の失敗を、可憐な兎に塗りつけずに希望と熱とに燃へて、國策樹立の先頭に、吾等のアンゴラ兎を押立てやうではないか、之れは吾組合員諸君、同志諸君、併せて、憂國の同志諸君に訴へる、吾等の救國の叫びである。

(昭和十一年七月五日記)

草の戦争

草刈り、山に草刈りに行く爺さんも居ないぢやないか」と。成程現在の農村の實況は斯ふでもあらうが、會社勤めの都會人は、自分の額も満足に洗へない程のあはたゞしきで割引の電車にアラ下つて出勤する、遅れ、ばそれ丈の収入に關係する。従つて、悠暢な身仕度などはして居られない。

△有畜農業の前提▽

農村問題に疲れ果てた一政客が這んな事を云つた。「農村問題はいくら骨を折つてやつても、本來の農村人が今のやうに怠け者では何の役にも立たない。見給へ、村で昔のやうに早起するものがない、山に草刈りに行く爺さんも居ないぢやないか」と。然らば都會人は忙がしく働き、農村人は朝寝をして怠けて居るのか、違ふ、現在の農村では朝起を特にする程の繁榮がない。農村景氣は益々農村人を滅入らせるばかりだ。早く起き度い農村人も、早く起きてする仕事の無いのを床の上で愚痴つて居ると云つた現状でもあらう。

「爺さんは山に草刈りに」と云はなければ昔漸のまくらにならない。その草刈りが永い事農村

に見られない。爺さんはもう草刈るのがいやになつたのか、それともそんな錢にもならぬ安仕事には係はつて居られないとでも云ふのか。

どつちも違ふ。早起と同じで、草を刈つて來ても役に立たないからだ。爺さんが草刈りを嫌になつた譯でもなければ、亦錢にならないからと云ふのでもない。今の農村ではそんな早起をして山に草刈りに出掛けなければならぬ必要がないからだ。何となれば刈つて來た草を喰はせる家畜が居ないではないか、従つて堆肥と云ふ譯にもならない。

人間は馬車馬ぢやない、尻を叩いたから走ると云ふ譯には參らぬ。走る必要があれば、鞭影なくも猪突する、家畜があり、肥料が必要となれば、毎朝山は年寄りばかりではない、人々の草刈で賑ふ筈である。有畜農業の助成されざる限り、農村の早起と草刈は望まれない。

變な事を云ふ様だが、吾日本では山の峯迄耕作してあるが、草の生やしてある處がない。草原を開墾して良田にする事は一日も早く成就されねばならぬ事であるが、同時に草の生へて居る場所の草の整理も重大事でなくてはならぬ。農家の
筆者が獨逸で経験した事は獨逸は國土の三分ノ二が山林であると云ふ事を聽かされたので、それは勿体ない事ではないか、今日の獨逸は耕地を要するのだ。それを山林にして松や楡を生やし

て居るのは如何にも不經濟で獨逸らしくないと云つたらある北地で、一獨逸人が笑ひながら這う云つた。

「山林の下を見て呉れ、刈つても堀つても生へる草なら、生へて役に立つ草を植へやうではないかと、人爲的に藥草や牧草が蒔かれて居るのだ。だから上から見れば役にも立ちそうにない山林だが、下を見れば有用な藥草畑だ」と。

國道は勿論、里道山道でも凡そ途と名の付く途の兩側は悉く並木にして居る獨逸としては山林を二重に使ふ位は朝飯前の事に違ひない。それで問題は獨逸以上の山林國である吾日本は、山林の下草を整理して見る必要はないものかどうか。

葉の役に立つ物、花の利用のきく物、莖の値になる物、根の賣れるもの、それらの種類によつて下草を整理してゆく事は、必ずしも理想ばかりの事でもなからう。殊に吾輩は有畜農業によつてのみ「農村自救の途を立てる」事を理想として居る立場からは少くも牧草を隨所に穫る最も卑近の實行から初めて見たいと思ふ。

何となれば、狭い日本としては、有畜農業の前提は草の問題である。肥料が農業の血液であるとするれば、堆肥は農業の米の飯である。有畜農業を可能ならしむるものも草であれば、農家を金

肥から救ひ出す救助綱も草である。現在各地を巡遊して目につくものは、アングラの奨励は要するに「草の戦争」に外ならぬと云ふ事である。山の高さを誇り野原の廣さを威張つて居る山國も、一度アングラを飼ひ出せばキツト草の戦争に落ち込んでゆく、畢竟するに好い兎や、有利に飼育出来るのも一に懸つて草の有無に歸着する。

今日の程度の飼育数では現在直ちに草の戦争は起らないとしても、毎戸と云はなくても十軒に一戸の飼育者を見るやうになつたら、それこそ現實に草の戦争が起るに相違ない。これは當局者の責任でもあらうし、亦飼育者の心掛けにもあらう。凡そ農村爲政者が高論卓説の足元から、先づ此實際の卑近な更生策を立て、ほしいものだ。(昭和十年八月五日記)

都會と農村

△獨逸 ラウベン・コロニー▽

獨逸の國境を通過して、直ぐに眼につくものは、都會に近づくに従つて、十坪乃至五六十坪位の地積が、四角に板圍ひされ、その中に色々な草花、苗木、野菜等々が作られその真中に矢張り板圍ひの二坪位の堀立小屋が色とりどりのペンキで塗り上げられて居る。

斯うしたものが市なり、町なり、村なりを一寸の空地も無い程に取り圍んで居る。だから汽車に乗つて居て、是等の板圍ひが見え出したなら「都會近し」と思つて差し支へない位である。これを獨逸ではラウベン・コロニーと云つて居る。日本では圓舎農園などと譯されて一度新聞になど出たが、此譯語も當らない、却つて原語通り遣つて居た方が無難だ。

筆者は七年前に、ある友人から此話を聞いた。そこで早速是れを實現して見やうと、現在筆者の住んで居る。相模原の林間都市に試みたが、これは物にはならなかつた。それは、日本のやうなどんな安い家賃の家でも一坪や二坪の庭なり露地なりの無い家はない、だから土を求めて遠

方迄出掛ける必要がない、これが失敗の主因であつた。

ラウベン・コロニー元來の目的は、都會の室住ひで、土の香と云つては、靴の裏か、外套に付いて居るほこり以外には、どこにも見られない都人士が、郊外に尺寸の地を得て、週末や暇のあつた時、一家擧つて出掛けて、シャツ一枚になつて土いぢりをして樂む仕掛けになつて居る。そして歸りには一本の花でも土産にしやうとする。どこ迄も獨逸人らしい、科學的で且つ趣味と實益を合せた仕方である。

然し、結果から云ふと、科學的趣味から出發したこのラウベン・コロニーは今日では無くてはならぬ社會機關のやうになつて了つた。

何となれば、初めは趣味で草花や野菜をつくつたのだが、元々利益も目的でなければ、農業も目的でないので、金錢に拘らず善い種、面白い苗、高價な野菜と云つたやうに道樂に傾いて來るのは當然だつた。

斯うして、善い種を得、高價な野菜、草花が生育するとなれば、勢い之れ等は地方農家に分譲される。云ひ換ればラウベン・コロニーは、何時とはなしに農家の「農藝試験所」と云つた程度のものになつた。而も基礎を經濟的におかぬなら、ドシ／＼良種が得られ、改良が出來て、結果

が益々良好となる。其良好な結果を、農家は居ながらに收めると云ふ、幸せとなるのである。

吾輩が農村と都市、農家と都會居住者との間を相互扶助の形ちで結び付ける標語として「手足を農村に、頭腦を都會に」と云ふ事を唱へ出したのは、此ラウベン・コロニーの組織と其社會的効果を知つたからの事であつた。尙、もふ一つの効果は、都人士に由つて、農産物の市場性を、事前に知り得る事である。

今日のやうに、農村は農村、都市は都市と云つたやうに、利害の上に對立するやうな間違つた現象、またそれを寄つてたかつて助長させやうとするやうな間違つた政治の行はれて居る際には特に都市農村の自然的融和の本体に歸らせる爲には、斯ふ云つた新組織が是非必要だと考へさせられる。

故に産業組合などの今後の方針は、只産業組合さへ繁昌すればいと云つた様な、片輪な行き方ではなく、都會と農村、農産物と市場、生産の消費等々凡ゆる点に於て、都鄙の相對線上に施設經綸されなくてはならぬと思ふ。吾アンゴラ組合の結成、發達等も一つの別なラウベン・コロニーの如く、相互に取扱はれなければならぬと考へて居る。

兎無くしては、養兎立國は立ち難いのは勿論だが、飼育者無くしては、如何にアンゴラが優秀

でも、國策は成り立たない、然し、其飼育者の伴侶となり、擁護者となつて、都會に活躍する吾等無くしては、飼育者の利益は確保されない、吾等の飼育者であると云ふ觀方と、飼育者の共同會社であると云ふ考へ方に由つてのみ、安護羅救國の實現が期せられる譯である。

然るに尙、飼育者諸君の中には、養兔の不安を惡宣傳されて、眞實と間違へたり十羽の兔毛を刈り取られて僅に七八十錢を興へられて、**アンゴラ**は割に合はぬと、惡ブローカーの餌食となる者が尠くない。飼育然りである。此他毛の利用法と其將來性とに就いては何一つ知られて居らぬと云つて過言でない程の實狀である。

是等は知らぬ者の罪か、知らせない方の責任かは、最早詮議立てする必要はない。吾社は茲に見る所あつて、飼育講習會を發案して、以上の欠陥を補頭し、併せて將來へのヨリ堅實な發達を期待するのである。幸に發表以來各方面からの申出殺到に、同人等は驚いて居る次第である。

知る事は第一に必要である、然し其知る事の活用は、一層緊切である。古來先哲は知易行難しと云つたが、孫逸仙は其逆を往つて行易知難と喝破した。然し、吾等としては知る事行易事の難易は問題ではない。知識を活かしてゆく心掛けが、總てを容易なものとして了うと、確信して居るお互が都會と農村と、相呼應して相互の利益の上に優秀な**アンゴラ**兔毛を活かして考へて見る

努力がやがて、救國の結果とならう。初めから難易の問題を問題とすべきではない。(昭和十一年九月記)

日本長口舌三人男

(文藝春秋より)

ジュネーヴ會議から歸朝された帝國全權松岡洋右氏が「鷺澤君が居たので一寸も退屈しなかつた」と大いに鷺澤氏の長口舌に舌を卷いたとの事だが、其の鷺澤氏が「よく喋る男」として敬服してゐる人に本多熊太郎氏がある。

松岡、本多兩氏の長口舌も有名な話だが、鷺澤氏の長口舌も相當なもので、氏の講演會は大概三時間から五時間を要する。政治、外交、經濟の全般に諸論、諷示を加へ縦横に説き來たり、説き去るのだ。

或る日此三人が一堂に會したことがあつた。各々他を制し自論を固執するので盡きない。そこで側の人々が次の様なことを言つた。

「今日はゆつくりやれ、併し銘々が勝手にやつたんでは結論を得られないから、先づ二十四時間を三つに區別り、一人八時間宛にしたら如何だ」
そして小さな聲で「さぞ喋り榮へがするだらう」

羊毛の雑説

△滿蒙とアングラ▽

資本主義に永く恵ま(？)れて居た日本は、國內で産出の無い主要産業の原料を、産出國よりも便利に且つ有利に供給されて居た。鐵も石炭もそうであらうが、先づ纖維工業から云つて羊毛と棉花とは、其の最たるものである。従つて、羊毛の輸入が止まる事や買はないと云つた程度の大激變が起らないとは、誰が想像したのであらふ。羊毛は安く上等なのが濠洲から、水の流るゝが如く不變に持ち込まれ棉花は印度の天上の散花の如く降つて來るものと、極めて漫然と考へられて居つた。そこへ印棉問題が起り、今又濠毛問題が國際外交化したので初めて羊毛は濠洲から來るもの、棉花は印度でとれるものと云つたやうな迷夢から醒めて、何處から、如何にして得るかは勿論の事として、今迄は實質的に考へても見なかつた。質の問題に立入つて、凡ゆる地方の羊毛を質的に検討しなくてはならなくなつた。甚だ不思議な現象だが、千年以上も毎日食つて居る米に就て、吾々日本人程無智識なのは無いと同様に、この位大膽に着て居る羊毛の質的智識に就

て、日本の羊毛使用者位、無智識なものはない。洋服屋さんでさへ朝晩羅紗を手にして居ながらどう云ふ風に取り扱つたら儲るか云ふ以外には、羊毛智識は無用の詮索だとされて居る。

然し、これ等は儲けなければ喰つてゆけない人や、安くなくては眞から困る「洋服細民」の事故、深く咎めては酷だ。が、一君の政治経世家が此間の微妙な働の上に迂濶である事は誠に容赦爲り難い痛根事だ。

濠毛問題が益々勃發した瞬間に先づ日本に上つた烽火は我にステイブル、ファイバーあり、何ぞ羊毛を要せんやと云ふ叫びであつた。小川商相の豪語にも一にも二にも、ステイブル、ファイバーを以て當らんとする、人絹屋の宣傳係りのやうな調子が見えた逸早く、ステイブル、ファイバーを譯して「人造羊毛」と云ふ其の中に、羊と毛とがどこに含まれて居るか、叫んだのは我等であつた。代用品で間に合せると云ふ叫びは、第二流國の泣言で、躍進日本の勃興産業から湧出る言葉ではない。四面を杜絶された戦時中の獨逸が、代用品を創作する外に途の無かつた時でさへも、代用品の使用が廣らした唯一の効果は代用品創作に關聯した「發明」を刺戟した事であつた。今後我國には代用品發明が各般に就て行はれるだらふ。然し、代用品が吾等の産業でも誇でもない事に留意しなければならぬ。況んやステイブル、ファイバーを以つて、羊毛に代り得る

ものとしての全幅の謳歌は、情けない滑稽だ。

申すも畏れ多い事ながら、八月十八日の都下の新聞は「商相は濠洲羊毛輸入制限の目的及び實
 狀を奏上」羊毛の代用たるステープル、ファイバー工業の現狀を言上すると「畏くも陛下には

「ステープル、ファイバーは未だ保溫が不充分ではないか」。

との御下問になつたので、いづれも叙述に恐懼感激して御前を退下した、と報じて居る。吾輩は
 一讀實に大御心の只ならぬのに一層の感激を覺へた。

吾輩は自分の過去の國家的生活につまされて商相の上記の奉答を情けなく思ふ。端的に結果か
 ら申そふ。若し商相が「我國が上下擧つて過去半世紀間容易ならざる犠牲、物質的にも、精神的
 にも」支拂つた爲めに、最近漸く我自由の天地となつた滿洲蒙古に、充分な羊毛が得られる事實
 に確たる認識を持ち、又我國産民業の大宗たる養蠶を此機會に羊毛の領域に喰入らしむ熱意を有
 し、更に亦燎原の火の如く勃興の兎毛工業に留意して居つたならば、畏多い御下問に對しての奉
 答は、如何に國家的に、如何に政治的に有意義であつたらふか。而して右に足らざる處を補ふに
 ステープル、ファイバー、人絹を以つてするとの事實と理路の整然たる國策に豫め用意する處が
 なかつたのは、實に遺憾至極である。日本の政治家が支那を論ずる事に、常に如何に空虚である

かは此一事を以つても知る事が出来る。何の爲めの滿蒙問題か。今日の非常時に備へる爲めの天
 與の國策ではなかつたか。羊毛は愚か、凡ゆる原料を支那大陸に求めて、而して後支那大陸を我
 市場たらしむる事が、吾日本の對世界の立國策ではないか。濠毛の不買に由つて滿蒙の羊毛を取
 入れ印度棉花の不買に由つて、北支棉花の栽培を計り、斯くして原料を支那に買ふ事に由つて、
 支那を躍進日本の産業の市場たらしめ、世界のシャットドアに冷然と對抗す可きではないか。
 半歳もかゝつて國策討論會に貴重の時日を空費した日本の政治家の上から、眞の滿蒙支那の意義
 を明かにせられなかつた事は痛恨骨髓に徹する次第だ。

農林省では農林國策として新規要求一億圓を計上した中に、緬羊増殖計畫二百六十一萬圓、
 が含まれて居る。其説明に由れば、「平時の軍部の需用を満し得る限度として緬羊百二十萬頭増
 殖を十ヶ年計劃」總額二千百萬圓を以て樹て初年度分としてニュージーランドより牝一萬二千頭
 牡四百八十頭を購入する、此外民間の緬羊輸入に對しては一頭に付五十圓の助成金を交付し、「一
 ヶ年約二萬頭の増殖を行ふ」と云ふ計劃であるさうだ。吾輩は緬羊飼育は吾國では駄目だと云ふ
 絶對論者だ。其理由は「羊は他の動物の踏んだ草を喰はない。」

アンゴラ・士志多美合併に際して

——國策新報生——

四八

「士志多美」は茨城縣に於ける、風見章君と同志諸君が、多年燃ゆるやうな氣を農村の爲めに吐いた、文字通り士志多美多機關紙であつた。「アンゴラ新報」は、農村救済の爲めに、是亦數年間安護羅救國を標榜した吾等同志の機關紙であつた、此兩機關紙が、兩紙支持の同志の合意に由つて、合併改題の上、單に「他方に限られた同志の機關紙たるに拘泥せず、廣く全國に呼びかけて、非常時突破の最前線に活躍する意氣が凝つて、名を『國策新報』と改め、新裝雄々しく茲に武者振り立つた次第である。

故に此合併改題は、世間常に見る營業政策や御都合主義に由つての改併ではない、全く士志多美、アンゴラ兩同志の救世的意圖の完き合致に由つて生れ出たものである、従つて、其歩む途は是迄吾等が高く標榜した理想の、一層切實な實現に外ならぬ。

農は國の大本なりの命題は、字句餘りに古臭く、當世の關心を惹くには不充分かもしれない、

併し周は、舊邦なれど、其命維れ新なりと云ふ「維新」の意義が嚴然として今日に活くる新生命なりとすれば、一見古臭い農の國本たる天命は、永久に新らしき生命と云はざるを得ない。資本主義旺盛の頃は農の如きは、産業上の一種の奴隷視されて居つた。然し、資本主義繁榮の没落の今日に於ては、農本による諸産業と其新國家機構に由るに非んば、今日以後の新生命を持続する能はざるに立ち至つた。農は舊制なれど、其命維新なりと云ふは如何なる時代にも正しい活きた事實である。吾等が農を主として、今日以後の時代を再建しやうとする本志はこゝにある。産業と云ひ、工業と云ひ、商業と云ふも、畢竟資源、勞働の根源たり蓄積たる農の堅き基礎の上に建てられなければ、一切國家の施設は砂上樓閣の空夢に過ぎない。奈翁は革命後疲弊のフランスを救ふ國策方針として「農は國家の魂で、且つ國礎である、産業は國家に幸福を與ふるもの、外國貿易は常に農業と國內産業の從僕であつて、農業と國內産業は斷じて外國貿易の奴隷となつてはならぬ」と喝破してゐる。

然り、農を魂とする國內産業の國際的延長の上に、躍進日本の實が示されねばならぬ、農より土に入り、更に進んで初めて、眞の國家の經濟的繁榮が實現されるわけである。

然るに、吾國現下の狀態は、此順序に甚だしき混亂が認められる現下の國際的經濟進出は、躍

進日本の繁榮として稱へられるが、其影響する處は、益々深刻なる地方的不景氣となつて居る、國際的に貿易上の利益が増大すればする程國民の生計は日に不如意の度を増して如實にハンガー・エキスポーテーションを現出してゐる。即ちナポレオンの斷乎として戒めた條項が遺憾ながら現在の日本を支配してゐる、此逆現象を是正する事が、今後の農本的國際經濟政策でなくてはならぬ現在各國の國民經濟（必らずしも農民のみと云はず）を更生すべき途は、其大綱に於て二つある一つは外より内に國際的に救濟する途と、内にあつては手段政策の上にも、更に本質的に救濟する途との二者並行にのみ由つて、新なる生命ある農本主義が確立するのである。第一は過去半世紀間之れあるが爲めに絶大の犠牲をはらつて、漸く吾手中に收め得た滿蒙、北支を取り入れての救濟策であり、第二は農本の本質を改めて、現代大衆の生活に添ひ得可き貨幣經濟上の新收入を得せしむる方策を立つる事である。數百年一日の如く耕し來れる、米麥蔬菜の收入を以つて、今日の生活に應ずべしとなすが如き、不親切にして且つ不合理なる農村政策を一抛す可きである。

此二大項目の實現を主として。然る後に今日の農村救濟論者が唱ふる諸政策の配合を行ふ可き順序であらふ。

更に亦ハンガー、エキスポーテーションの逆現象として、國民間に醸成されつつある遺憾なき鎖關係が、現在に於ては、ことごとくが對立の怪現象を呈してゐる、實に國民經濟上の一大危機と云はざるを得ない。今日各地に於て抗争しつゝある産業組合と商權擁護運動の如きは、實に國本を蠱毒する以外何等の利益なき愚劣極まる現象である。其他農工業商各界を仔細に検討すれば新日本樹立の上に、改廢是正す可き千百の事例を發見す可し、是等の時弊に對し、又將來への新規軸に向つての、凡ゆる部門に阿るなき檢討を全國同志と共に行ひ、新農村政策樹立の一大指示たらんとする抱負が、即ち吾國策新報の使命である。

初め、同人等は本紙創刊の本旨に則り『農と工商』の好名目を選定したが、不幸にして同類の先願者あつて、遂に吾等の主義を適切に表現す可き字句を見當らず、由つて平凡なれども、凡ゆる意義を包含し、且つ現下の國狀が求めて急なる國策の二字を冠して、新装の衣冠を正した。

斯くて吾國策新報が今後如何に意義ある進行を初む可きかは、吾等同人の努力と同志諸君の熱意に由つて、必ず期待にそむかざることを確信するものである。創刊に際して一言、吾等同人の素志を述べて、全國の同志に檄する次第である。

（昭和十一年十一月記）

支那問題の徹底的解決策こそは、日本國家の存亡の上に重大性を持つことは論を俟たない。

鷺澤與四二氏は此大陸國策を積年、自己の政治信念として、大衆の前に披歴し來たつたが、今回事變勃發と同時に、其長期性を豫測するや、抗戰即建設の二大經綸を國民の前に發表し、特に東亞再建の根本策は經濟開發が第一義なりと論じ、國民に邁へる所があつた。本文は氏の信念的解決の意志表示である。

此論文が東亞建設の上に一大指標となり得るならば編者の幸とする所である。

支那を正視せよ

(イ) 國際的に見た支那

第一に、これを國際的に、即ちインターナショナルケースとして考へてみることである。日本は、聯盟を脱退した時に、國際日本としての男となつたのだ。同時に、西洋歐米各國の羈絆を脱して、獨往自主の外交をなし得る舞臺に上つた。

しかしてそこに一つの失策を持たなかつたか。日本は聯盟を脱退する時に、日本と一諸に支那をも連れて歸るべきではなかつたか。國際聯盟に、支那を残して來たことが、實に、我々の「東洋自決主義」からいつて禍根だと思ふ。

従つてこんどの事件ではその禍根を一掃し、支那大陸に於ける日本の立場を如實に世界に向つて承認せしむる必要があると信ずる。

日本は、決して弱い支那を叩いて、ただ戰爭氣分に陶醉してゐる時ではない。もはや支那問題は世界中のどの國にも御世話はかけないで、日本のみが決定權を持つものであるといふ意味を十

分に世界へ宣言し、確立する必要がある。

だから、日本にとっては今回の事變は一つの劃時代的のものと見ることが出来るのである。こゝに觀點をおいて日本が十分の自信をもつて頑張るのなら、みだりに列國に哀願するとか、或は列國の意嚮を訊かせるとか、又は日本の是なりと信する理由を論ずる必要は些もない筈である。即ち、日本の世界外交に於ける劃時代を自ら作る機會であると考へねばならぬと思ふ。

(口) 對支政策の轉換

第二は、對支問題の根本的な確立を圖ることである。

日本の、今までの對支外交は、外交そのものとしてもなつてゐなかつたと云ふだけでなく、國內的にも、何等の用意も持たなかつたのである。換言すれば、對支問題の外交もゼロだし政治もゼロであつた。

一體日本の風潮を顧れば、今日迄支那を論ずる事は、大英帝國を論ずるよりも遙かに薄かつたではないか。たとへていふならば、自分の身内を考へることは他人の事を考へるよりも薄い、といふやうな間違つたことをやつてゐたのである。だから三十年間に亘つて二度も戦争をせねばな

らぬといふやうな結果に陥つてしまつたのである。

然らばこれは誰の責任であらうか。

私は、いまここに既往の責任を問はうとするのではないが、今後において、十分の覺悟と決心を、日本國民の一人々々に求めたいと思ふのである。

日本も、支那に對してこんどこそは、威信を十二分に確立したのである。

従つて、今までのやうに排日、侮日をただく我慢し、——世間への氣がねをし、自省ばかりしてゐると云ふチソボケな量見は一擲しなければならぬと思ふ。

斯る意味に於いて、こんどの事變は、對支問題解決の最も愉快なる機會であるのである。私は從來の無方策極る對支政策の缺陷をここに一々擧げたくないが、政府の方針といふか、朝野の意見といふか、從來の對支方針の重大な過誤だけは、國民もぜひ認識し、その過誤を訂正し革新して行かねばならぬと思ふ。翻つて見るに或ひは柳行李一つで支那に渡り百人のうち一人か二人かが、ダニの如く支那に喰ひ付き、二十年三十年の粒々辛苦の結果、僅かに在留民として多少の權益を獲得したといふ人がある。或ひは、誰からも援けられることなく、支那の奥地にまで天秤棒一本で働きに行つたといふ人、また、大陸經營に當り、卒先して身命を堵し支那に入つて

来たといふ人、これ等の諸君に對して、日本の國家は從來どれだけの擁護をしてきたであらうか。今日、南京政府は怪しからぬとか、國民黨は怪しからぬの聲は大きい、この國民黨を育てたのは誰か。この革命を援けたのは誰か。みな、日本である。日本なかりせば、いかに孫逸仙が神様扱ひをされても、支那の今日の革命は起きてゐなかつたのである。

然るに日本人は、革命の都合のいい時はチャホヤするが、ちよつと失意の地位が來ると、ヤレ孫逸仙はホラ吹きだと言つて、惜しげもなく捨ててしまふ。そして、この捨てられた革命を、横から出てきて拾つたのがロシアのボロジンであつた。

ところが、こんどは、これが共產黨だといつて叩く。

これを春秋の論法をもつてすれば、國民黨をロシアに近づかしめたのは日本の心ない仕業だ、日本がかやうにまで導いたといひ得るではないか。

畢竟日本の對支策に對する無定見の罪でなくして何であらうか。

國民黨が起きて清朝を倒した當時の日本の示したやうな情熱を、日本が今も尙、國を擧げて持續してきたならば、南京政府は共產黨どころでなく、南京政府は日本政府なりと言つて、むしろ

世界各國が日本に抗議を申込んでくるやうな結果が起つたであらうと想像する。

日本には口に、支那々々と言ふいはゆる支那通の政治家は澤山あるが、先頃まで漢文を廢止しろといった文部大臣さへゐたではないか。

また、對支外交は、わが世界外交の根幹だといふ。そしてそれを取扱ふ外務省に於て、いつ、支那語を外交官試験に入れたか、かつてないのである。

更に言ふならば、教育亡國といはれる程の經費を、國民に出さしておきながら、どこの中學校に、支那語を正規の學科として教へてゐるところが會つてあつたか。

政治家は、支那に行けとはいふけれども、實際はどうだ？ 喰ひつめてしまふと、「支那にでも、行かうかな」といふ以外に、支那に行つたことがあるか。

斯かる無定見を列擧してゐてはきりが、ない。支那に關しては、全部が全部なつてゐなかつた事ばかりである。

徒らに明治時代の歐米崇拜熱は、今だに盛んなもので、頭の痛くなるやうな英語やフランス語を、しきりに上、中、小の學校で教へてゐるが、行くべき運命を持ち、治外法權を双肩に荷ふて堂々と行き得る支那語を教へ、支那の實狀を日本に教へてゐるところは何處にもない。

また日本の小學校の讀本を見てもそうだ。支那の教科書は排日を教育してゐるといつて大いに騒いでゐるが、日本では尋常六年間の本の中に支那に關することは六つしか入つてゐない。

しかるに、西洋のアレキサンダー、ピーター大帝は偉いとか、ロンドンは廣いとか、さういつたやうな漠然とした歐米崇拜熱ばかりを教へてゐるのである。

まことに、情ない現状であると云はねばならぬ。

従つてこの點に關しては、今日迄の日本の政治家は悉く落第であるといつてもいいと思ふ。

斯くの如く國內的に、支那への用意と知識のなさを繰りかへしてゐるから、三十年間に二度も國民の血と骨を犠牲にせねばならなかつたのである。

私は軍國主義者じやないが、この點を考へると、海陸空皇軍の眞劍な活躍に改めて敬意を表さざるを得ないのである。

かつて日本は、政治外交によつて大きくなつた例は一つもないのである。日本の大きくなつたのは、いつでも戦争以外にはなかつた。これは歴史が明らかに教へてくれてゐる。

なぜさうであつたかといふと、爲すべき任務を持つものが怠慢で常に爲さないから、やむを得ず、力を使用しなければならぬといふ結果になつたのである。

陸軍あたりの方が支那大陸へ行つてゐるのを見れば、幼年學校で支那語を勉強して、大學に入つて、それから支那に留學する、^{イ、アル、サシ}、^{二、}、^{三、}といふ支那語のイロハからやり出すのである。

今日、支那に派遣されてゐる軍人で支那語の喋れない人は一人もゐない。支那語が出来てゐるから、柳條溝の一發によつて、三十年來解決の出来なかつた滿洲を一舉に解決し、蘆溝橋の一發によつて北支を解決することが出来るのである。

而して、その解決の演題を見出したと云ふことは、軍人諸君が偉いといふよりは、むしろ日々支那の實狀をその地で十分に研究して居たからかゝる成果を納め得たのである。

日本の多数は、支那がどつちにあるかも知らない人が、机上の空論で支那を論じてゐる。だから、實際の支那を知る事に甚だ遠い、只空理空論しか現はれて來ないのである。

日本人の見る支那及支那人、歐米人の見る支那及支那人、支那人の見る支那、といったやうな明らかな區別をもつて俎上にのせられた事も、研究された事もないのである。

だから今日まで、日本は支那に、あらゆる犠牲と莫大な經費を拂つて居りながら、いつかうに支那問題の解決が付かなかつたのである。

これほどまで支那に對して無關心であるかと思へば、歎しいと云ふよりむしろ恐しくなつて來る。斯くの如きは全く歴代政府の怠慢である。

その痛憤から、海、陸、空皇軍の軍人諸君が、一命を惜しまず、この破局を一掃してやるぞ、と今日蹶起された事に對しては、國民はまづ、多大の感謝と敬意を拂はねばならぬ。

故に、對支問題の要は、支那の反省よりも、日本が支那を正視するといふことであり、支那を我國と同様に研究することである。

恐らくこんどの事變で、過去數十年間、支那に骨と血を埋めた諸君の靈魂は、今こそ、地下に身をふるはせて感激してゐるに相異なるまいと思ふ。我々が捨てた骨も血も、決して無駄ではなかつたと喜んでゐるだらうと想像する。前總理大臣近衛公の先公である篤磨公の如きは、卒先してこの戦局に志した先覺者である。その人のお子さんが、今日臺閣にあつて、全面的にあたられるといふことは、近衛文磨公の仕事といふよりも、篤磨公の靈が致せるものなりと、我々も考へていいのである。

この點については、まだ、千、百、幾らでも盡す用意があるが、この際は個條的にくはしく申上げることは略すとす。

ただ、政府に委かせておいてはいけない。

支那問題は、全國民の關心事なのであり、我々日本人の生命線ともいふべきなのであるから、細心の注意と研究を、全國民が持つて頂きたいことを、私は、切望して止まないのである。

とにかく、今までのやうな、支那へ對する迂闊な事では、いけないのである。今後支那に對して従前通りの事しか出來ないといふならば、それは、日本が戦に勝つて、しかも、自殺を遂げると同様の運命に陥るのである。

二度と再びその轍を踏んではならぬと云ふことを私は特にこの際絶叫したいのである。朝野を問はず、全國民は、新たなる認識の下に支那研究に猛然と國を擧げて奮起することを慫慂したいのである。

私はこれが、銃後の國民の重大なる義務であると思ふ。

數多の英靈をして犬死に終らしむる勿れ。

これが即ち、戦局の最も優秀なる結果といはなければならないと思ふ。

(八) 支那問題は我が國內問題

第三は、「支那人の支那」である。これを、日本の國內問題として見なければならぬ。今日まで、一般國民は、支那の事を論じて支那問題は實に重大である。またわが兩民族の共存共榮と云ふことを叫んで來たが、それは一種の文字の遊戯にしか過ぎなかつた憾みがあるのである。

敢へて私は斷言するが今日迄日本に於て、支那問題を實際に説いた人が何人あつたか。即ち、日本と支那との不可分關係を十分に認識して叫んだ人が、幾人あつたか。八千萬國民の中に、支那問題は我國の農村問題なりと言つて、その眞意を了解し得る人が幾人あつたか。

政治家は、農村問題だといへば、補助金の問題だ、ヤレ肥料の問題だと、こんな程度の知識しかなくて、支那大陸が直ちに、日本の國內問題などと、考へを及ぼした先見の明のある人はなかつたではないか。

私は、道樂に、趣味に、支那問題を口にしてゐるのではない。また、單に征服慾觀から言ふでもないが、日本の外交にしろ、お體裁のみに捉はれてゐるべきではないか。たゞ口先だけで支那に行け、支那は活舞臺なりと言つてただでは何等の實益を伴つてゐない。ところで今日になつて見れば、支那問題はわが國內問題であると云ふことは、益々明瞭となつて來たのである。

なぜなら今日は、農村の子弟の血肉は滿洲の地に埋つてゐる。また北支に上海に日本と支那は單に一片の儀禮でなく、貴い國民の血でつながつてゐる。これ以上の密接な關係が他にあらうか即ち、支那大陸といふものは日本人勇士の墳墓の地となつたのである。

ゆゑに、私共は所謂支那問題を國內問題にまで還元して、その解決を計らねばならないのである。

我々が今日、單なる日支事變を遊戯的に解釋して居つたならば、戦線から歸つてきた人は、何と思ふであらうか、内地へ歸つて見ると戦争には大勝したに拘はらず、家には生活苦あり、滯納處分が待つてゐると云ふ有様であればどうなるか、國民が國家への最高の義務を盡したといふ反面に何物もない、といふ事になつた時、日本の社會問題は、容易ならざる爆發を來たす懼れが多分にある。

そこで私は重ねて言ふ。

日本の繁榮も、ただ支那大陸の繁榮に歸し、また日本の衰微も支那大陸の今後の施設如何によつて決するものであるといふ事を、この際、全國民は深く認識して、この時局の收拾を國內的に

考へねばならぬのである。而してそれはひとり、政治家にまかせてはいけない。全國民舉つて、これに當るべきであると信ずる。

さきごろ、(十二年度)二十億の追加豫算の議會が開かれた時に、國民の代表者である議會に於て、一回の秘密會議さへ要求されなかつたといふ事實を考へて、果して、日本の今後に處する日本民族政治の根幹を如何にして進展せしめてゆくか、この重大問題は、そんなうかつな態度では到底成就しないのである。

我々は、戦費が百億、二百億と雖ども、この大事業を完成する爲には敢えて辭するものでもなく、その用意は十分に持つべきである。しかし、この百億は、一個人の働きではなくて、全國民の聲として、國民全體の實際として、之を示さねばならぬといふ時に、これを議了する議會に於て、かゝる態度を以て通過せしめたことは、實に遺憾千萬と思ふ。

この點は國內問題として、實に重要に取扱はねばならぬと思ふ。ただ、儲ければよい、また、單に、戦争がすんで大なる災害がなくてよかつたといふやうな、單純な根性であるてはならないのである。

この點で英國について教へられるのは、いはゆる大英帝國のグレートブリテンといふ字が如實に現れたことである。英國は大陸政策を完成した時にはじめて、グレートといふ字を使ひ始めたのである。

従つて日本も、この機會に於て、支那大陸政策を完成した曉に、はじめて大日本帝國が顯はれるのであると云ふ覺悟を持たねばならないと信ずる。

これらのことを深く論じてゆけば際限がないが、要は、全國民がこの事變後に、何等かのよき影響あらしめるやうに、最上の努力を拂はねばならぬと思ふのである。つまり、國際的の支那時局。日本の對支政策。これに順應して日本國內の持つ時局。此の三段に分けて、今後は、政府ばかりでなく實業家も爲政者も教育家も、全國民各自が奮起し、事變後の日本の工作を完全に行ひ、日本の將來の爲に、萬全の策をとることが必要だと信ずるのである。これをして始めて眞の舉國一致といふべきであると思ふのである。

支那開發の具體策

六八

(イ) 英國商權を封ぜよ

然らば斯る見地に立つて具體的に支那を如何にすべきか、對支の經濟工作は如何にして行くべきであるか、特に北支の經濟工作は如何にして行くか、この點に就いて私は些か私見を披歴して見たい。

北支は漢人種の發祥の地である。黄河は、季節的に氾濫して、高原地を肥沃の地と化し農業地としての缺くべからざる作用をなしてゐる。この地方の農業は、いはゆる「黄土」といふ土でできており、殆んど肥料の要らないといふやうな土地であるから、農産物には最も適してゐる。ただ、その農産物の買上げによつて支那人に金を與へ、そして農産物を獎勵し、そこに日本に必要な原料を見出すといふやうなことをやつて開拓してゆくならば、その結果は支那の國民に購賣力を持たせ結局日

本品が餘計に出ると云ふことになつて必ずや成功すると思ふ。なぜならこれは、他では見られない、實に肥沃の土地であるからである。それは、山東省一つだけでも十分だと言つても差支へない。しかし農産物だけでは不十分だ。

然らば、北支一帯を、どんな方法によつて開拓すれば好いか、これは案ずるよりも産むが易しであつて、案外簡單明瞭な解決策があるのではないかと思ふ。

なぜかといふと、元來、支那の經濟は、悉く揚子江流域に限られてゐる。ところで、いまの戰時状態では、この揚子江流域の經濟活動が停止させてゐる状態にある。それで、この際、この方面の經濟施設をそつくりそのまま、目をつむつて北支へ移したら如何か。

たとへば、招商局といふ、日本の郵船會社のやうなものが上海にある。これは英國の資本系だが、沿岸貿易第一だといふ日本が、この招商局に、何等の手をつけることが出来ないで、そこで致し方なく、日清汽船を使つて居つた。

これらの招商局を、青島に設けてみるのは如何か。天津に設けるといふことは如何か。また、山西の石炭は一噸二百圓もとらなければ採算が合はぬといふならば、資金を手に入れて

綏遠、大同、大營其他の附近に於て工場を建てるならば、この山西の石炭は、殆んどタダで使へやう。

更にまた、經濟活動の基礎をなすべき金融機關である。

この點では日本は、英國のやり方を學ばねばならぬ。上海あたりには、五大銀行といつて、銀行は澤山あるが、悲しい哉、日本の國民及び日本の政府は、支那に投資してゐるかといふと、さつぱり投資して居らぬ。支那に、預金を持つてゐるものもないのである。

これと反對に英國は、揚子江流域に於て商權を失つたといふが、香港上海銀行が持つてゐる支那人の銀預金といふものは、一體、どのくらゐあるかといふことは現在の世界の謎である。いまから二十年前あたりは、二億圓と稱せられたが、恐らく今日は、十億圓になつてゐるか、二十億になつてゐるかは、想像外である。

この銀資本があるから、英國の商權が今日尙、生き残つてゐるのである。

日本の銀行は、只手形の割引ばかりしてゐる。金銀の差額の相場をしてゐるのである。

第一日本の銀行は、銀預金を取扱はない。預金としての銀を認めないのである。

日本の商品は、支那市場に於て風靡してゐるといふが、その基礎の金融は、日本は凡ゆる點で

金本位である。

だから、金の所在地、即ち東京の景氣が悪ければ、支那の商賣人はどしどし引上げてしまふといふのが、日本の對支經濟の缺陷である。

(ロ) 北支開發の中樞機關

これが重大問題である。今後、北支の市場化を計るといふが、この金融機關の整備を第一にしないと、商人が商品を持つて行つても賣ることが出来ない。しかるに現在でも、臺灣銀行、朝鮮銀行がいゝといつて紙幣を發行してゐるが、そんなけちなローカルカラーを出すべきではない。地方色をいれたものではない。もつと堂々たる大規模のものを設置しなければならぬ。

それには正金銀行の札でもいいし、日本銀行の札でもいい、臺灣銀行、朝鮮銀行の札でもいいといふやうな、ちつほけな問題ではない。戦時に對する、金融發展經濟の基礎をなすものを創設して、もつと大局的な措置を講じなければならぬと思ふ。

それについては先年、滙業銀行といふのを日支合辦の銀資本で建てた。それが今日、天津にある。本店は、支那人の預金を納めてゐるが、蔣介石革命が出現し南京政府が出来た瞬間に閉店し

て今日尙そのまゝになつてゐる。支那人の預金をもつて日本の銀行は潰れてゐるのである。

上海に於ては、香港、上海銀行は支那人の預金は埋高くなつて、今日の支那人は有難がつてゐる時に、日本の銀行は潰れてゐるといふ状態だ。

これでは經濟的發展は出来るといふものではない。

だから、北支開發には、まづ手始めとして、銀行、金融のことを圖るとすれば、滙業銀行を開店して、支那人の感情を良くしてやらねばならぬ。それから出發して、着々と進めてゆくのが最もよい方法の一つである。

また、南方に於ては、漢治萍の製鐵事業がある。これには日本の資本も少しは入つてゐるが、それを、北支に、工場を新設して、現在、日本に入つてゐる安徽省の鐵鑛、その他、腐る程あるといふ北支の鐵を、北支に於て、精鐵化するといふことも、一つの企業である。

まあ、これらをいち／＼擧げてみれば、數へ切れないほど澤山ある。

とにかく今日の狀態で、南方に於て閉鎖してゐるものをどし／＼北支に移してゆくといふことが緊要だと考へる。

更に、基礎的な問題として指摘したいのは、支那に對する經濟投資發展とか、また、資源調査

といふことを言つてゐるが、（これは必ずしも支那ばかりでなく、日本内地でも同様であるが）日本の財界には、生れ出るものをとりあげるところの產婆役がないのである。むしろ、死んでゆく骨を焼く役目はあるが、この產婆役の會社がない。昔は、澁澤子爵が委員長といふことになる。株がプレミアムがついて何倍となつた。今日でも、郷誠之助君が委員長になると何倍とはなる。しかるに實際は、會社が出来上つてみると、澁澤さんの株は一株もない。さうかといつて、それらの知名人の名を得られなければ永久に會社は生まれないのである。これではいけない。

従つて北支を開發するには、北支の資源を取り上げて、財界の仲介機關とするところの、いはゆるアメリカで四十年前に始まり、今日のアメリカを産んだところのトラスト・カンパニーに似たものを、ぜひこの際作るべきであると思ふ。

今日は、各會社が自己の調査局を持つてゐる。しかしこの調査は、依然として、殆んど全部は「死體解剖」である。統計の遊戲である。生きた臨床的のもの一つもない。

だから今日、どこの會社へ行つてみても、調査はしてゐるけれども、直に間に合ふものは殆んど絶無と云つていい位だ。

そこでトラスト・カンパニーの如きものが出来れば、その點は極めて確實にして而も簡便に行

くのである。たとへば、山西の山奥にある事業をそのまま持つてきて、東京の資本家を招かうとしても招けるものでない。

故に、まづ第一に、信託会社を作つてその仲介の勞をとらせたがよい。山西の信託会社に於て取り入れて、それを改めて、財界の人が食べるやうな形に直せば、投資し易いのである。同時に投資を躊躇されたやうな場合には、信託会社が自ら行ふことが必要である。

ともかく、北支の經濟開發の近途は、まづ信託会社のやうなものを作つて、その仲介機關をして、支那の資源と日本の財界との間の橋渡しをせねばならぬと思ふ。これが非常なる活躍をすれば、必ずや發展する。

ただ、重大なポイントは、これらの機關を運用する「人」で、私利私慾を離れて、しかして、國家の大局の上から日支兩國の經濟的發展の爲に盡すといふやうな、白熱的な精神と、技術を持つた人でなければならぬことは勿論である。

會社は生れても、「人」に於て、眞に適任者を得なければ甚だ困難であるが、しかし、こんな機關も、今日に於てこそ速に設立されるべきものであらうと思ふ。

しかし、ここに重大な悩みが一つある。それは、支那の現實の姿を日本人が知らなすぎる點である。いはゆる支那通は多いとはいへ、今まで、支那くらの研究を閑却されたところはないのである。

その爲に、さあ北支經濟化を行ふといつても、どこにも成案ない。

たとへば、滿蒙の羊毛といふが、「滿蒙の羊毛が役に立ちますか」と同業者自身が質問をする。北支の棉花といふと「支那で棉花ができますか」といふやうな程度で、誠に困つたものである。

また或者は、北支の經濟化は誠によい。しかしまづ第一に、日本は金が足りないから産金事業を起したらよからうと云ふのである。

一應尤もな話だが、いまは戰爭中で金山がどこにあるか判らないのに、産金事業を起すどころの騒ぎではない。山にころ／＼してゐる固い黄色い色をしてゐる岩ばかりが金ではないのである。産金事業くらひ金のかかる仕事はないのだ。日本人はすぐ、金が出なければ駄目だ、石炭がとれなければつまらぬといふが、棉花それ自體が金だ。畑に播いた棉が一封度とれる。それが金である。北支の遊牧の民が引きすつてゐる羊の毛を切ればそれが金である。鑛夫を募つて行つて、金鑛を探す。そんな事だけでは、日支兩民族を一括する經濟とか政治とかいふものは出來ないので

ある。そこで先づもつて、經濟化といふことは、さう遠方に行くことではなくして、滿蒙、北支の市場化を計ることが急務であると思ふ。

このマーケット化をすれば、日本の商品をその市場に賣り、支那人を安んじて買はせることが出来るのである。

(ハ) 支那市場の確立策

ところで北支の市場化は、いはゆる國內の中小工業者救済の眼目であつて、國內問題としても極めて重大である。即ち、鐘紡であるとか東洋紡であるとか、これらの大資本の對支企業會社はかく、戦局の見透しをつけてゐるから、今は損しても、この損に堪え、時來つて解決した場合に、その數倍の利益を得て見せるといふ努力も、確信もあるから堪えられるが、一番に困るのは中小商工業者の打撃である。

支那に於ける商業は日本が世界第一であるが、その商品の大部分は、日本内地の中小商工業者の家内工業から産み出すものである。一二臺の機械を買込んで、そしてたゞ問屋だのみで、その

製品を問屋に持つてきて、それを北支へ送り出す。これが即ち支那の南北全土を風靡してゐるところの日本の商品の勇躍といふことである。

それが今日、戦局で支那の市場が杜絶してしまつた。随つて一番に困るものはこれらの人々である。これらの中小商工業者には訴へるところがない。夜逃げをするとか、或は商賣替へをしつつあるものもある。しかも世間からは之を重大視されない。西部戦線異状なしと同一に片附けられてゐるのが今日の現状である。

しかし、これらの人を救ふといふのは、必ずしも慈善事業だと云ふ觀念ではない。これは、對支經濟の大方針となすのみならず、わが國內問題解決の鍵でもあるのである。といふのは、今月よりは來月、といふ如く暮正月に至つての景氣は益々深刻になつて來るだらう。製品は賣れない。息子は戦場に出てゐる。外の商賣替へしやうとしても資金をどこに求めるか。こんな氣毒な人を、内に於ては救済し、その製品を北支に賣出す機會を與へる上からいつても、一日も早く、北支の市場化を確立しなければならぬ。これは拙速主義でもよい。その確立が、一日一時も早い方が宜いのである。

紡績事業の如きは、大きな水の流れてあるけれども、支那全土に入るものはこれらの人々中

幸 所 論 を 慰 ん

辜鴻銘を想ふ

鴛澤與 四二二

辜鴻銘先生の人物

親日家辜鴻銘先生は、十年ばかり以前に我が國に來朝され、幾多の話題を残して居られるから御記憶の方も少くないことと思ふ。

たゞ先生の日本滞在中は、其の眞骨頂を發揮される様な機會が餘りなかつたので、先生が實に得難き尊い親日家であるといふ印象を與へることが出来なかつたやうに思ふ。私は茲に親日家といふ形容詞めいた文字を用ひてゐるが、先生は世間ありふれた親日家のやうに、事件が起ると思ひ出したやうに、人に知られるといふ程度の親日家ではなかつた。

先生は全く日本の國體や、或は日本民族の精神文明に同化されて、他人のことを考へるのではなく、自分のことだといふ風に、全然日本人になりすまして居られた。

先生が熱と勇氣と又その驚くべき才智とを何人と雖も追隨を許さぬ獨特の文章と口舌に移して

輕薄なる日本攻撃を、文字通り木ツ葉微塵に打ちくだいて行く光景といふものは實に吾々にとつて感激そのものでもあり亦痛快至極のものであつた。

私は先般支那に旅行して來たが、各外國新聞等が、目に餘る日本の惡口を叩いて居るのを見ては、辜先生を識る誰でも『今日迄辜老を生かしておきたかつたなあ！』と、相省みて歎聲を洩してゐるのを聞いた。

若しも現在辜先生が、生きて居られたならば、今日見るやうな上海や香港の英米新聞の讒悔中傷の記事に對しては、恐らく日本人としては何人を問はず『萬歲』と叫びたくなる程の痛烈さを以つて、日本の爲めに戦つてくれたことであらうと思ふのである。

然らば先生は如何なる風に日本を辯護されたか、或はさういつた親日がどうして先生の腹の中に湧いて來たかといふことを説く前にまづ先生の多岐な經歷を極めて簡単に申述べて置く。

先生は度南の生れである。生前自分でもよく云つて居られたが、先生の幼時は終日赤裸體でヤジの木の上から、海の中に飛び込んでばかり遊んで居られたさうだ。所謂サベリズの蠻人だつたと、よく云つて居られた。

先生は確か十四歳の時に、父親の友人であつた或る教師に連れられて英國に渡られ、小學、中

學、大學ともに英國で教育されたといふ。其の後エヂインバラ大學の哲學科を卒業されて、支那に歸つて來られたのが、先生の廿三歳の時であると云ふ。

そこで話は餘談になるが、其の歸國の船中で一緒になつたのが、同じく英國留學を終へて歸國の途に就いて居つた所の、後に帝國大學總長をつとめられた菊地大麓先生であつたさうだ。此の二人ともに西洋を識れば識るほど、東洋文化の貴さを痛感するといふ點から大いに意氣相投じた揚句『東洋には大義名分といふことがあるが、西洋にはない、一體何と譯して歐米人に知らしたらよいであらうか、これは適譯が見當らないが、お互ひに一つこれを譯して、東洋の眞價を彼等に知らしてやらうではないか、どちらが先に譯すか、出來たら通知し合はふ』といふ約束のやうな、又氣焔のやうなことを云つて別れられたが、後丁度十年目に辜先生が之にほゞ近い譯語を得たといつて、其の譯語を菊地先生に通知されたといふ先生から御伺ひした。

辜先生と張之洞のエピソード

斯うして先生の歸國後は、新歸朝者といふので、當時新知識を求めて居つた清末の大政治家張之洞の幕賓として拔擢された。これにも、亦辜先生の面目躍如たる面白いエピソードがある。

當時の大官中の大官ともいふべき張之洞の面前に出れば、誰でも猫の前の鼠のやうに縮み上つて了つて、言葉一つ返すことも出来ない大權威のものであつた。

だが英國仕込みの青年は洒々たるもので、問はるゝまゝに滔々と怪氣焰を上げたから、附添ひの者が汗ビツシヨリになつて恐縮してゐた。ところが張之洞は、さういつた會見には、いつも瓜子兒（木瓜の種子）をポリ／＼と噛みながら話をして居つたものださうであるが、新歸朝の青年は少時之れを見て居つたが、その中に突如手を伸して張氏の前の小皿を引寄せて、その中から瓜子兒をつまみ出し、ポリ／＼と食ひ出した。

これには流石に並居る諸大官も、實際飛び上る程驚いて眞青になつたが、本人は至極平氣である。張之洞も一旦はアツと驚いたものゝ流石大政治家だけにこやつ食ひがらをどうするだらうと黙つて見て居ると、如何な無法者も綺麗に掃除されてゐる床の上に捨ててもならず、暫くセジ／＼して居たが、フト氣が付いて、食ひがらを支那服の袖の中に入れてのを見て、張之洞も苦笑しながらやつぱり多少の禮心はあると、これを面白く見て居つたさうだ。

備で此の會見が終つてイザ歸らふと立上つた刹那、此の青年は兩の袖をブル／＼と振つて食ひがらを皆床の上に落してサツサと歸つて行つた。

支那では斯ういふ無法法は假令苦力でもない國柄であるから、普通の場合なら、採用などは愚か、手打ちにでもなつて了ふ程の無禮なのだが、其の奇行が却つて張氏の氣に入つて、遂に採用の上、最年少の幕賓となつて帷幄に參することになつたのだ。

辜氏が英文學の上に、又支那古典を咀嚼して、獨特の立場を作り得たのは、爾後張氏から受けた直接感化に外ならなかつた。其の當時、先生は西湖總督、即ち今の漢口に居つたのであるが、わが伊藤公が張之洞を訪ひ、日支提携の合作を行つた時に、通譯をしたのが青年幕賓の辜鴻銘であつた。

その時の話が一應終つて雑談となり、青年子弟の教育といふやうな話になつた時に伊藤公がわが國には造士館を早くから建て、子弟の教育を致して居ると、いさゝか得意氣に語つたさうであるが、暇を告げて外に出ると辜老がボンと肩を叩いて、閣下は今造士館のことを得意に語られたが、士は造るものではない、養ふものだから、養士館でなければいかぬ、造士館では人間の機械製造になると云つてのけたので、流石の伊藤公も、啞然たるものがあつたさうである。

斯うした奇行を話して居つたなら際限もないが、後年自分でもクレジー・クート、即ち『氣狂ひ事』と自稱して居つた程、當るを幸ひ、半可通の支那論者や惡意の日本攻撃者流を叩いて蹴つ

て踏むといった程度にまで叩きつけて居られた。又東西南北人と稱して、四通八達何でも来いと、有ゆる喧嘩を買って、日本武士道の體得者としての大見得を切つて居たのである。

辜氏の親日と其の夫人

この後年の辜老を最初に發見された人は、今上海に居られる船津辰一郎氏であつた。船津氏が香港の領事時代に、同じ室隣りに居る夫人で、實に齒ぎれのいゝ、日本語を喋る人が辜鴻銘の奥さんであるところの日本人であつたのだ。

この日本娘と辜氏との物語に就ては、茲に語り盡せぬロマンスがあるが、要するに徳川幕末の士族の娘が、大陸にカドわかされて、もう一步で悲惨な暗い生活に入らうとした瞬間に、辜氏の爲に救はれ、それが縁となつて夫婦になつたものであるといふ風に御承知願ひたい。辜先生が、日本の武士道鼓吹を後半生の仕事と心得られたのも、その夫人の感化に由るといつても差支へないのである。

元來辜氏は次の様な信念を持つて居られたのである。

『支那古來の精神文明は、即ち今日の日本武士道と同様のものであつたのだ、然るに北方蠻族の侵入南下に由つて、眞の支那文明といふものは、江蘇、浙江の間に追ひつめられ、遂に海を渡つて日本に傳へられた。』

それ以來の支那は、外域のバーバリズムに侵され、眞の東洋の精神文明は武士道となつて日本に現存されたのである。故に支那の文化政策は日本から其の精神文明を譲り受けて、眞に大義明分の本來の支那を再建しなくてはならぬ』と。

これが辜先生の腹の底まで食ひ入つてゐた信念であつた。随つて、排日を憎むことは、支那の亡國を自ら招くものとして、内外人を戒め、遂に有名な『春秋大義』を著して、内外人に警告を與へられた。

故に外來の思想にかぶれた薄つべらの歐米通を極度に排撃して、常に『ハーフ、ペークド、ブレッド』即ち生ま焼けのパンと罵倒して居られた。これはつまり何でも喰べるが、パンの生焼きだけはどうしても喰べられないといふ痛罵だつたのである。今日の國民黨政治家の如きは、辜先生の口からは、常に亡國の毒蟲と罵られて居つたものだ。

故に日支親善といふ言葉は、いつも日本からばかり唱へられて、支那側からは一向に其の聲を

聴かないのみか、わが日支親善の聲に對しては、常に排日を以つて酬いられて居つたのであるが、辜先生一人のみは、日本の精神文明を取り返さねばならぬ、どうか分けて貰ひ度いと、日本に哀願すべきだと、卒直大膽に叫びつゞけて居られた。

然るに張之洞も死し、清末の政道道義が愈々紊れるに及んで、奸雄袁世凱の爲めに、清朝は倒壊し、當時三歳の幼帝も、その落ち行く先も知らぬといふ悲惨な有様となつた時に、折柄北京に居られた辜鴻銘先生は、上海に残した家族の身の上を案じて、忽惶歸滬された。

だが幸ひに家族の無事なのを見て、ホット安堵して腰を落ち付けられようとした瞬間に彼の日本夫人は、キツト襟を正して、嚴かに「こゝにお座りなさい」と夫君の辜先生を睨みつけた。その見幕に驚いた先生は、何事かと座に就かれると「あなたは今上海の家族の身の上が案じられるから歸つたと仰言つたが今清朝はどうなつてゐるのでありますか？ あなたは曾つて清朝の粟を喰んだ人ではありませんか。その清朝は、今や兇雄袁世凱の爲めに倒されて、幼帝の所在も明かでないといふではありませんか。平常大義明分を説き、武士道の眞髓を體得したと豪語するあなたとしては實に見苦しき態度ではありませんか。一旦の臣は、一朝の主家の爲めに命を捨てるのが、日本武士道の常道であります。」

口に武士道を説き、身に之れを行ひ得ないやうな卑怯者は一刻たりとも此處にお止め申すこととはなりません。即刻直ちに又北京にお戻りなさい。家を忘れて國事に奔命するのが、眞の日本武士の行爲であります。家の内事は武夫の妻たる者の務であるから、あなたは少しも女々しい心配をすることは要りませぬ。さあ直ぐお立ちなさい」と言葉烈しく追ひ立てられたといふ。

こゝに於て辜先生も冷汗淋漓、慚愧の念に堪へ兼ねて轉ぶやうに飛び出されたのだが、其の時はじめて、武士道の大悟を得たと、後年當時の光景を語る度毎に、辜老の眼は爛々と輝いて、唇の震ふのを見た。革命數年の後病歿した其の賢婦人に付ては、辜先生ばかりではなく、其の逸事を聴く毎に吾々も亦常に心の緊張を覚えるのであつた。

その時先生は、懷中にタツタ八錢しかなかつたさうだが、夫が毅然として立上つたのを見ると夫人は豫て貯へて置いた若干の金を旅費として、手渡して、暗涙を以つて先生を送り出されたといふことである。

その物語をする毎に、彼は日本の強いのは次の時代に男を遺す武士道的な女が澤山居るからだ、暇があれば麻雀をしたり、賭事ばかりして居る支那の女からは、偉い男は生れなくなると痛歎してをられた。

先生の北京に於ける活動

斯くて先生は北京に入るや、『大不正袁世凱』と罵つて、火を吐くやうな痛罵を浴せ流石の袁世凱も先生ばかりはもてあましたといふ。

當時日本の機關紙であつた、順天時報紙上に連日袁攻撃を先生は敢てして憚らなかつたのである。支那では流石に文化萬能の表看板の手前、露骨に學者を迫害することは、却つて自滅の暴舉として排斥されるから、斯ういふ時の學者の權威といふものはうらやましい位痛快なものだ。

而もその時の袁世凱の帝政運動には、日本が堂々と四面から反對して居つたので、尙更辜鴻銘の袁攻撃はめざましいものであつた。清朝が倒壊しても、先生は其の亡妻の遺訓を奉じて、辨髪をつけ、清朝の服を着けて、堂々支那各地を濶歩して居られた。だから袁の死後も國民黨の共和制には極端な反對をされて、『大統領などいふものは任期だけの責任しか買はないのだ、如何なる失政があつても辭職すればそれまでである。而も前大統領などいふ名譽まで與へられて居るではないか。こんな責任の明白でない政治が何んで存続しよう、東亞は帝王の國である。帝王は生るゝや王位に就いて、世を終るまで責任を

逃るゝことは出来ない、大統領は辭職すれば命を完ふするが、獨のカイゼルでも露のニコラスでも、身を以て責に任じたではないか。故に支那は帝王の國でなければならぬ。王者は責任を逃るゝことなく、惡に親まざる王道の上に、永遠にましますのだ』と死ぬまでキツパリと帝政王道を叫び續けられたのは、實に清末に於ける唯一の光明であつた。

若し辜先生をして、今日の滿洲帝國を見せしめたなら、彼は狂氣亂舞して、筆舌に一層の鋭さを示して、共產黨にさいなまれてゐる國民黨政治家の不甲斐なきを痛罵されたことであらうと思ふ。

後年、國民黨の政治が追々邪道に入り、排日煽動を一黨の務と心得た時のことである、今から丁度十五年ばかり以前、辜先生は北京大學でラテン語の教授をして居られた時のことである。

當時は大學の學生などが隊を作り、旗を立て、大排日運動を起し、東單牌樓の日本の小商店の前に於て示威運動をした時、丁度私は途上で辜先生と行き會ふた。

すると先生は手で顔をかくし、日本語で、『恥しいです』といつて、去られたが、『二三時間すると電話が掛つて來た。そして言はれるに『今日から北京大學を止めたから後は頼むぞ!』といふ簡単な話だつた。一體何事かと、早速行つて譯を訊いてみると、その排日運動のあつた當日、

全北京大學の學生を講堂に集めて大演説を初めて曰く「一體お前達は、何たる情ない馬鹿者が！汚い旗など立て、下らぬ排日歌を唄つて、ねり歩くとは、全く呆れ果てた仕打だ、若し眞にお前等が國を憂へるといふのなら、丁度日本の明治維新にロンドンに留學した二十歳臺の伊藤公等が、急據歸國して對内外の國政に當つたやうに振舞へ！！」

日に我支那を列國に賣り渡して居る賣奴は日本人ぢやない。右大人胡同の大樓（外交部のある處の町の名）にある。若しお前等が本當に國を憂ふるのなら、何も此の寒空にみつともない、行列などねり歩かなくてもよい、この位の……」と

兩手でタドン位の大ききをして見せながら爆烈彈を外交部の賣國奴の中に投り込めばいい、そんな勇氣のない見當違ひの排日學生など教へるのは自分の穢れだから、今日限り此の大學を罷めてやると、呆氣にとられた學生達を尻目に見て歸つてからの電話であつたのだ。頼むぞと云はれたのは、罷めれば月給はフイだからといふ意味であつたやうだ。

先生と私との關係

爾來、わが機關紙として私が創設した、ノース・チャイナ、スタンダード紙上に痛烈無比の彩

文を掲げて、排日外人を十把一からげに打倒した彼の最も花々しい日本擁護論の花の咲いた時が開けたのであつた。また其の支那學生の排日をよい機會として、煽動がましく書き立てた外人等に對しても、遂に一語を發せしめぬまでに叩きつけて了つた。先生はこういふのだ「歐洲が今日文化を享樂し得るのは、日本が彼等に代つてロシアを叩き、その南下を防いでやつたからのことだ、然るに未だ日本に向つて歐洲の何處の一國でも、「サンキュー」といつてお禮を云つた國はないのみならず、却つて排日を煽動して居るとは怪しからぬ。武士道日本は、身を殺して仁を爲すのを其の根本として居るから、お前等の我儘に對しては、泣言などは云はぬが、日本人を見損ふな！」と云つた調子だつた。

先般私が支那事情を述べた時引用した言葉即ち「日本人は對手が一步進めば二歩退く、對手が二歩進めば三歩退く、一見甚だ意氣地ないやうに見えるが、日本人が後を省みたら用心をしろ、後に退く可き一步も餘して居らぬと見た瞬間に、正宗の銘刀が對手の心臓にグサと刺つてゐる。其の氣合を知らずにノシかゝつた支那が、日清戦争で叩きつけられ、後退日本を弱しと見くびつたロシアが、日露戦争の傷手を受けたのだ、歐米人よ、日本人の武士道を踏みつけないやうに注意せよ」と。之れを歐米人の排日の眞中に公開して、日本人の爲に、萬丈の氣焔を吐いてくれた

時、その一文を読んだ者は、誰もその眞實と熱意とに、感激の涙を禁じ得なかつたのである。

先生は英語は英國人よりもよく語り、よく書き又佛語や獨逸語の如きも母國語のやうに話したり書いたりされた。

ラテンは大學教授の本業とし得る程度であるから、爾餘の世界語に就てもその主要な言語文字は悉く之を心得て居つた程の、語學上の天才であつた。

而も專攻が英國古典であつて、支那の經書であるから、如何なる外國人と雖も同席して語り合つたなら、數分間を出ずして何十人居らうとも忽ち沈黙をまもらざるを得ず、先生の聽手となつて了ふ痛快きは、恐らく絶後と云はぬまでも、二度と現はれさうもない性格の人であつたと思ふ。而もその語る處、説破する處が、悉く吾々が言はんとしていひ得ないところの、つまり吾々日本の國粹を本として、天馬空を往くが如く説き來り、説き去るのであるから、傍で聽く吾々としても實に血湧き肉躍る感があつた。それに其の警句の妙、應答の敏、筆力の自在は眞に口八丁手八丁といふのであるから吾々後輩が、今日まで先生を生かしておきたかつたと愚痴を云ふのも無理がないのであらう。

先生此文を讀まれた所の當時の朝鮮總督齋藤大將は、是非一度京城に來て、客となつて欲しい

と云はれて、旅費を送つて來られたのが縁となつて、日本に來られた。

其の途中奉天で、飛ぶ鳥も落すといふ勢のあつた張作霖を眼下に見下して「お前のやうな無學者と俺のやうな學者とは國を憂ふる誠意に於て一致する。しつかりやれ」と云ひ放つたのが縁となつて、張作霖が老先生を養ひ度いと申出で、當時又々奇縁にも船津氏が奉天總領事であつたので、氏を通じてその約束が、後年日本から歸つた後の老後を養ふ時に實行されたのであつた。今日正義日本が、世界の不認識な曲論に惱まされてゐる際、辜先生を想ふこと益々切なるものがある。

(昭和十四年一月於放送局)

昭和十四年七月二十日印刷
昭和十四年七月廿五日發行

禁轉載

發行所

實際的なるアゴン兔飼育法

第五卷
アゴン飼育と
現金収入

東京市芝區田村町二丁目八番地

國策新報社

電話銀座(57)二、六五二番
振替東京一、二二三、三〇三番

【定價五十錢(送料六錢)】
東京市芝區田村町二ノ八

發行兼編輯印刷人 齋藤幸男

東京市日本橋區茅場町一ノ七

印刷所 相場印刷所

東京アンゴラ社会飼育研究所編
實際的アンゴラ兔飼育法

◇最新待望のアンゴラ飼育叢書（既刊は本字）
 毎月一回發賣

- 第一卷 アンゴラ養兔の智識
- 第二卷 蕃殖と育成
- 第三卷 飼料
- 第四卷 アンゴラ兔の健康と疾病
- 第五卷 アンゴラ飼育と現金收入

全五卷
 選擇自由
 （各冊四六判百餘頁平均）
 挿入寫眞多數美本
 各冊
金五拾錢
 （送料六錢）

東京芝区田町 策新報社
 電話銀座二六五二番
 東京芝区田町 策新報社
 電話銀座二六五二番

390
339

1854
1855
1856
1857
1858
1859
1860
1861
1862
1863
1864
1865
1866
1867
1868
1869
1870
1871
1872
1873
1874
1875
1876
1877
1878
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900

終



國策新報社發行